特104
40
×複写

精神療法講義錄

第五輯

古屋鐵石講述

靈力發顯術

東京 精神研究會

始

ヤ104
40

講述
科目

靈力發顯術

古屋鐵石講述

精神療法講義錄

第五輯

大正
9. 11 3
内交

自序

此書にて述べたる所の諸術は、此方面に就きて、何等の智識經驗の無い人が、之を見ると非常に不可思議の事のみであると思ふ、之は恰も化學の實驗で、無學者が試驗紙の色の變化するのを見て、魔術である、と驚嘆する類である、何事にても其原理が明白となると、其原理の應用に依て現はるゝ現象は、當然の結果である、不可思議として驚愕するの價値はない、本書に記述せる諸術も、原理が明かとなると不可思議の現象として推奬するの價値はないが、人間の靈力を客觀的に觀察する唯一の良法であります。私は之等の諸術が人間の靈力によりて發顯することを

實驗し、且人間の靈力は修養次第可驚偉大の働きをすることを感得して、靈力の發顯に志し、修養を積み健全なる精神と肉體とを養成し、靈的精神療法家としての實力を養成し、重病者を救濟し、小にしては一身一家の幸福と安寧とを圖り、大にしては國家を富强にし、皇威を萬世に益々輝す一助ともなれかし、と思うて此書を公にすることと致しました、一言を記して序文と致します。

大正九庚申夏日

古屋鐵石識

靈力發顯術

目次

第一章　緒言……一
第二章　棒寄棒開術……五
第三章　紙刀棒切術……八
第四章　火呑火食術……一〇
第五章　人體刺針術……一二
第六章　麻繩手斷術……一四
第七章　人體輕飛術……一六
第八章　覺醒時錯覺術……一七
第九章　刀劍刃止術……二〇

第十章　靈媒普蘭術……二二
第十一章　卽感人體自由術……三〇
第十二章　鐵棒屈曲術……三三
第十三章　人體架橋術……三四
第十四章　輕重轉換術……三七
第十五章　鳥蟲止動術……三九
第十六章　剛膽不死身術……四一
第十七章　熱湯入手術……四三
第十八章　熱鐵扱術……四五
第十九章　掌上火焰術……四七
第二十章　棒天狗術……四八
第二十一章　讀筋讀心術……五〇

目次

第二十二章　靈力消燈術……五三
第二十三章　金剛不壞身術……五四
第二十四章　魔法振子術……五七
第二十五章　物體靈動術……五九
第二十六章　圓机靈轉術……六一
第二十七章　靈智靈覺術……六三
第二十八章　靈動寫眞術……六五
第二十九章　萬里眼透見術……六七
第三十章　現神現佛術……六九
第三十一章　結論……七二

終

明治天皇御製

器には從ひながらいはほをも
とほすは水の力なりけり

何事も思ふがまゝにならざるが
かへつて人の身の爲にこそ

靈力發顯術

古屋鐵石講述

第一章　緒言

何人にも靈力はある

人には誰にも心の奥に靈力がある、靈力の働きは實に偉大である、決して惡い方に働かない、然るに人が社會に於て善い事のみをせず、且つ其の行爲が甚だ薄弱であるのは、畢竟妄念發生して、絶えず靈力を隱蔽するからである、

靈力の本體

故に不思議なる諸術を行ひ、重病を癒さんとする人は、靈力を發顯する修養をなす必要がある、其修養法としては、妄念雜念を拂ふ事と、靈力本體をして益々偉大ならしむる事に歸着する、誰にも心の奥には惡い事をしてはならぬと云ふ囁きがある、其れは卽ち靈力の囁きである、然し乍ら其人の境遇及修養の如何に依つて、其心の奥の私言は全く沒却して、唯惡い使嗾のみが勝を占め、遂に惡事をするのである、如何なる惡人にても、心の奥には惡い事を

人間の靈力に強弱ある所以

して、はならぬと云ふ囁きは多少ある、之れ卽ち靈力本體の働きである。

大陽の光線をレンズを以て集むれば、其焦點にては、火を發して、物體を燃燒せしむる力がある、吾人の靈力の働きも普通に於ては其力は微弱であるけれども、修養を積んで其力を强烈に集むれば、平常の心を以て思ひもよらぬ偉大の大現象を現はす事が出來る、試みに見よ雨の降る日は太陽は少しも照さぬ、之れは雨天が太陽の光線をたつたからである、人間の靈力も普通は妄念雜念に被はれて、少しも光を發せぬ、又普通に於ては其の力は微弱であるが修養次第で驚く可き靈力を發顯するものであります。

靈力發揮修養法

靈力を働かして奇象を發顯せんとするには先づ其修養法として心を清くして、煩悶の種子となる所の人の感情を害する事、曲がりたる慾心を去ること、博愛なる事を要します、而して人を喜ばしたい社會のために善事を盡したひ、何事にも感謝の念を以て居る事は此修養法の前提であります、而して後に靜坐呼吸法、又は自己催眠法を行ひ、個人の精神は宇宙精神と合致し得る狀態迄修養するを必要とします、然るに靈力は發顯されて、奇象は自由自

確心と現象

在に現出されます、此靈力を發顯せんとするには、催眠學の一斑に通じて置く必要がある、又奇象を發顯せんとするには、大確心と大鍛錬とを必要とします、之を實現すること一回よりは二回、二回よりは三回と、數多の實驗を積む程、巧に奇象を現出し得ます、私が下に述べたる數多の奇象中には、眞に靈力作用のみによるものあるも、物理的の現象に外ならざるものもあります、然れども物理を超越して靈力に依つて顯出せしむる程度迄深く研究せんことを切望する者であります、此世に於ける百般の事、何事でも單に手足の技藝にてなし得ることゝ雖も、深く其れを研究し堂奧に達すると終に靈力の作用となり、妙技を現はすのであります、彼の繪畫でも文章でも、普通には手の先き又は腦の働きによつて成る者であるも、進んで靈力の發顯により成るに至り、初めて俗を脫したる妙技が現はるゝのである、其れで靈力によりて成れる其文章繪畫には靈力が罩つて居り、世界の珍品として萬世不朽に賞贊は絕えないのである、本書に記述せる諸術中の多くの術も、單に物理にのみよりても無論現出し得るものがある、然れども、私は前述の理由に

物理的の事も妙技は靈力の發顯

て、物理を超越して靈力の發顯に依て現出する迄、總ての術を研究せんことを切望し之を實行し普及するものであります、故に彼の術は物理で行ひ得ることで、靈力の作用とは眞赤な嘘だと非難する人若しあらば、其人は一を知り二を知らざる痴者にして、火を口中に入れて口を火傷せない迄のことを研究して、火を口中に入るゝや口中冷却を感ずることを研究せざるものである、針を肉體に刺たが痛みを感じない迄の研究で針を刺すや非常の快感を覺ゆることを研究せざる故に、往々物理の現象であると誤解するのである、之に依て本書に講述の諸術は悉く靈力の作用である事を知るべきであります、其れで靈力の發顯として諸術を行ふには、精神を修養し靈力を發顯することが主眼になつて居る、普通には確心が堅ければ堅き程、術は巧妙に不思議な現象を起すことを得ます、然り而して奇象を現出しても奇妙なり不思議なり、と世人を思はしむるのみにては實生活上に何等の實益がない、我々が好んで不思議の現象を研究するのは、物好で行ふのではない、精神力の偉大であることを立證する方法として、之を行ひ研究するのである

不思議の現象何の利あるか

之れに依つて此原理を應用して、自己の心身を健全にし進んで他人の心身をも健全に導き、尚進んでは哲學、科學、宗教、教育の諸疑問を解決して社會百般の事業に應用して、進歩發達せしめんとするのが本旨であります、以下に述べる諸術の現象は此の意を以て御研究御實驗あらん事を、切望するものであります。

無意的現象

第二章　棒寄棒開術

先づ術者被術者に長さ六尺、直徑一寸位の二本の棒を授け、被術者をして直立せしめ、體の兩側に兩手を下げて、左右の手に各〻一本づゝ棒を持たせ置き、術者は被術者の前方約六尺の位置に直立し姿勢を正して被術者に對して『其棒を寄せまいとも、寄せ樣とも何とも思はずに居なさい』と云ひ置き、被術者をして其通りにして居らしむる、時に術者精神を統一して『其棒の先端は次第に近寄りて密接する、尚ヅーッと寄る』と心力を凝めて言語暗示を繰り返すと、其暗示の通りに棒は次第々々に寄りて密接するもので

反抗的棒寄術

あります。

次に術者被術者に對して『君が如何に其棒の先きを寄せまいと勉めても私が一、二、三と聲をかくれば棒の先きは次第に寄り合ふて、遂には密着する』と豫告的暗示を與へて置き、術者精神を統一し念力を凝めて『一、二、三』と稱號すれば、其棒の先端は次第に寄りて全く密接するものである、其時被術者大に反抗して寄せまいと勉めても、其効無く棒は次第に寄り合うて密着するものである、其寄りたる棒を其儘に持たせ置き、術者自ら『私が棒は開くと云ふと、其棒の先端が開くから開かない樣に勉めて居なさい』と云ひ置き、心力を凝めて『棒の先は開く、開く開く』と暗示すると、棒の先は次第に開きて元の如く左右に分るゝものである。

氣合で握りし棒を落す

次に術者『私がエイッと氣合をかくれば、其棒を如何に落すまいと努めても、棒は手より落ちるから、落さぬ樣に注意して居なさい』と云ひ置き、術者エイッと大喝一聲すれば、兩手は忽然開いて棒はバタリと落るものである、若し一聲にて落ちざる時は、二聲、三聲、四聲、五聲、力を凝めて氣合をかくると、

術者巧拙の分岐點

遂に棒は落るものである。

又術者被術者に其棒を堅く握らせ『持ちたる棒は私が一言離れぬと云へば如何に放さんとしても放す事は出來ぬ』と豫備的暗示をなしたる後に『其れ其棒は放れぬ』と暗示すれば、被術者は如何に其棒を離さうとしても放す事は出來ぬ、傍觀者來りて、棒を强く引き被術者の手より引き離さんとするも放れぬものである、術者が一言『離れる』と云へば棒は忽ち離れて落ちる。

斯る不思議の現象を呈する被術者と雖も、殊更に被術者に對して催眠の方法を行ひ、催眠せしめて後に、之を行ふに非ずして、覺醒狀態にある人に對して、直ちに行うて成功するのである、去り乍ら握つた棒が如何にしても離れぬ現象を呈する被術者は、其心理狀態は、催眠狀態の第二期たる止動狀態に在らねば行はれぬ、依て一度催眠法を施して、第二期の催眠狀態となしたることある人を被術者として行へば、必ず見事に此現象を現すことを得ます、之に依りて初めて會ふた人に對して此法を行はんと欲せば、此人は是等の

暗示の意氣

暗示に感應する感受性を以て居るか、否かを看破し、其の感性に合ふ暗示をすると、否とが術者としての巧拙の分るゝ所であります。

前段に暗示と云ふ文字がありましたが、暗示とは術者の強い觀念を、言語舉動又は精神を以て被術者に通ずる、すると被術者は其術者の觀念の通りの觀念となり、其觀念の通りに被術者の肉體が變る現象である、エイッと云ふ大喝的の氣合は、之れ又被術者の精神を轉換して、被術者の精神と肉體とを變る暗示の一種であります、故に、言語暗示をなし、又は大喝的氣合を掛けんと欲するときは、術者は精神統一の極致に達したるとき、精神力を罩めて行ふのである、故に若し其暗示又は氣合に精神が罩らざれば、何等の反應なく滑稽に終ることもあります、術者は大に、修養を要する所以であります。

第三章　紙刀棒切術

紙刀棒切術の實驗は、實に不思議である、先づ被術者に一本の細き棒を與へ、兩手を以て其棒の兩端を堅く持たせ、前方に水平に擡げしめて置き、術者姿

紙刀名刀の如く切れる

武士道空竹割

勢を正して一枚の半紙を取り、之を疊みて御酒の口形となし、恰も古昔劍術士が紙折の御酒の口を以て、切り込む太刀を受け止めたるが如くに構へ、精神を統一し、術者の精神宇宙靈と合體せし狀態となるや、右手に持ちし紙刀を以て、一聲高くエイッと云ふ掛聲と共に棒の中央目掛けて一擊するや、棒は眞二つに切斷せらるゝものである、初めは細い杉の割箸を用ひ、次第に太きものに移り、或は二本、三本、四本と棒を束ねて一度に持ち居るも、之れ亦見事に切斷せらるゝ狀態は、恰も正宗の名刀を翳して人參を切るが如くに鮮かに切らるゝものである。

序に武士道空竹割の法を述べませう、二個のコップを約三尺距てゝ棒の上に置き、其コップとコップの上に直徑一寸位の青竹を水平に横たえ置き、術者は其前に立ち、木刀を振りかざし、青竹の中央を一擊するや、竹は見事に折れるも兩端のコップは些少の損傷もないものである。

又青竹を一枚の紙を以て兩端を釣り置き、其中央を木刀にて一擊すると、其青竹は二つに折れるも、左右の釣りたる紙は更に破れぬものである、青竹に

棒折竹折の理由

代ゆるに枯竹を以てすると見事に二つに切斷されます。紙折にて、例へ小さい棒と雖ども、棒が見事に切斷せらるゝは不思議である、之は物理的の關係が加はつて居るも、精神の一念凝つて紙刀が金刀の如く働くのである、昔石を見て親を喰ひ殺した親の敵たる虎であると誤認し、之を射止めんとして一念を凝めて放ちたる弓の矢は石を貫きたりと云ふ話がある、其現象と同一理由に依て、精神力の偉大なる働きの一つである。武士道空竹割の原理は、精神統一力の偉大なる働きと、一擊する其一擊が極めて急激なるが故に、竹の中央を打ちし響きは、其兩端に及ばぬ先に、中央が折れる故に其兩端のコップ又は紙は損せずに竹が折れるものであると思ふ。此實驗も初め二三回は失敗に終る事がありても、撓まず練習すると、忽ち鮮かに行ひ得る樣になります。

第四章　火呑火食術

先づ實驗室の中央にテーブルを置き、其上に蠟燭數十本とマッチとを用意し、術者其前に立ち、五本の蠟燭に火を點じ、術者自己の袖を捲くり上げて腕を露出し、精神を統一して蠟火を附けても熱くないとの觀念を強めて、而して後に焔々たる蠟燭の火を腕に押し當てるも、腕に何等の熱さも痛みもないものである、況んや少しも火傷を生ずることのないのは勿論である。

火焔を腕に當てたり口中に入れる術

又術者口を開いて其火焔を口中に挿入して呑み、其れを取り出したり、又挿入て呑む事數回に及ぶも、何ともないものである。次に白紙を採りて燭燭の火にて燒き焔々と燃え上る火炎を口中に差し入れて食す、續いて又白紙に火を點じて口中に投入て食することを數回行ふと口中は冷却を覺ゆるものである。

火が却つて冷たい

次に火鉢を取り寄せ、炭火を火箸にて挾み取り口中に入れ、齒にて嚙むも少しも熱火を感ぜざるのみか、却つて口中は冷たさを覺えるものである、之は精神力を以て此火は熱くない、冷たいと強く觀念して、然る後之を決行する故、火は少しも熱く感ぜず、却つて冷たく感ずるのであります、火が冷たく感ずるのは物理の現象に超越したる、靈的の現象である、畢竟觀念の通りに感

覺も肉體も變化する事の實證の一つである、病氣が觀念一つで癒る所以も、之と同一であります、爰に一言注意すべきは、火は無形の物故之を眞に呑みたり食したりすることを得ざるや勿論である、只爰にては燃えてをる火が口中に入りて消えて消失するの意と解されたし。

第五章　人體刺針術

觀念と感覺

人體に針を刺すのを初めて見たる人は、非常に不思議に思ふも、一度自ら針を採りて我が身體に刺して見ると、存外容易のことであることを認むるものであります、此法は畢竟確心力を增す一方法に過ぎません、此法中特に注意す可きことは、針を刺しても痛くないと强く觀念し、假令刺す際多少痛くても少しも氣に留めずに居ることが肝要である、然ると次には痛み少しもなくなり、終には刺針により却つて快感を起します、術者自ら肉體に針を刺すときは空氣を吸入して下腹部に留めて置く其一刹那に針を刺すのが秘傳である、又針を拔く際も刺す時と同じ樣に空氣を吸入して心を下腹部に

刺針時の觀念

留め力を凝め居る其一刹那に拔くとよい、術者が他人の肉體に刺すときも他人をして斯くなさしめて置き、而して後に行ふと痛みを感ぜず快感を覺ゆるものである。

實驗の方法

先づ之を實驗せんと欲せば机上に裁縫用の大針數本を準備し置き、術者自己の片腕を露はし、片手に針を持つて腕に此針を刺し貫くも別に痛みも感ぜぬと强く觀念し、精神を統一して下腹部に心を留め置き、而して後に一氣呵成的に刺すのである、初めて之を行ふときは、不安の感がありても、一度試むと、存外痛よないものである、次回よりは何でもないとの確信を得て、容易に深く刺し得るものである、確信の程度高まらば次には疊針又は錐をも刺し得るものである、其刺す場所としては、腕が一番安全である、其他耳朶又は頰肉へ刺すのもよい、但し靜脈は避けるがよい、鍛錬が積むと腕に刺したる針の先に絲を引き掛け、其絲の先端に椅子を結びつけて引き廻すことも出來る、然る後に其針又は錐を引き拔くも、少しも其痕跡を認めず、況や血は一滴も出ないものである、之れ卽ち觀念の通に肉體を變化するとの心身相關

心身相關

の原則の應用である、從て強い觀念を如何にして養成するかゞ研究の眼目である、裁縫用の針位は誰にでも刺せるものです、論より證據諸君直ちに實驗をして見たまへ、容易に行はれます、痛みも知らずに刺し得たのみでは未だ研究は足らぬ刺針にて快感を呈する程、卽ち眞に靈力の發動迄研究するを要します。

第六章　麻縄手斷術

脊負縄を手にて切る

術者先づ直徑一分位の麻縄を持つて直立し、左右の手に其縄の端を各捲きつけて、左右の手の間隔を一尺五寸位となし、然る後思念を凝し精神を統一して、エイッの一聲を發すると共に電光石火兩手を左右に開けば、縄は忽然切れて二つとなるものである、麻縄は次第に太きものを用ひ、終には脊負縄直徑四分位をも切り得るものである、縄は太き程切るに困難である、併し精神力が强烈なればなる程容易に切斷し得るものである、精神力卽ち其れが大なる力となつて、縄を切り得るのである、其縄を以て單に重量を吊すのであれば、二百貫乃至三百貫のものを釣り上げるも決して切斷せない、其れが精神力を以て容易に切り得るのであるから、研究を重ぬれば重ねる程面白い實驗が出來る所以であります。

第三者が指定の場所より縄を切る法

此麻縄手斷術は强烈なる精神力の發露であるも、一つは秘傳があります、秘傳は物理的の現象である、其れは手に其縄の一端を卷く際に一つの綾を掛けて置く事である、其綾の掛け方は實地に就て見なければ紙に書いても解らぬ事を領得せられたい、而して何人でも此處より切斷せよと指定せる場所より切斷することを得ます、卽ち第三者が縄の此處より切斷して見よと云うて、其處へ墨を付けて置くと、其墨を符したる處よりポツリと切斷する事意の儘である、其れは其墨のつき居る所に綾を掛けて置くのである、すると其の綾の處より切れるものである、研究が積むと物理の力を藉らず卽ち綾をかけずして細き綿絲を切る如く太き麻縄を切斷することを得ます、精神統一の力は實に偉大である、故に此實驗によりて見ると、吾人は何事をするにも、如何なる職業に從事するにも、精神を統一して行はゞ其効蹟や蓋し

精神統一と百般の業

實に偉大である、吾人は精神統一の修養を積みて、而して之を百般の事業に應用して、大效を擧げんと欲するものであります。

第七章　人體輕飛術

人體數尺吹き飛ばさる

人體輕飛術は術者直立して居り、其前に被術者も直立して居り、互に片手を伸して各相手方の胸に附し居り、術者が口にてフッと一吹すれば被術者の身體は輕くなり後方に蹌踉として飛ぶ術である、其場合に術者の腕力弱くして、被術者は腕力強く共容易に後に突き飛ばしむることを得、之れ恰も大人が四五歳の小兒を容易に突飛すに異らず。

先づ此術を行ふには、術者と被術者とは共に直立して居り、各々手を前に延し相對者の胸に手の先を接觸せしめ置き、被術者に向つて後方に倒れない樣に全身に力を込めて居られたいと注意し、後に術者は口にて靜に一吹すると被術者の身體は輕くなりて後方に蹌踉として飛ばさるゝものである、之を傍觀せる研究者は實に不思議に堪へず、我に對して試みてと云ふ者多くあるものである、すると術者は順に一人宛に就きて術を行ふ、と順に何十名にても悉く鮮かに輕く吹き飛す事を得ます。角力にても柔術にても此法を應用すれば、容易に勝を占むる事が出來る、相撲にても柔道にても取組まぬ前に此法を行へば角力なれば、相手を土俵の外に飛ばし、柔道なれば相手を吹き飛して仕舞ふ事が出來る、此方法を非常に強烈に行へば相手方を數間の遠きに吹き飛して倒れしめ、腦震蕩を起さして人事不省に陷らしむる事も出來ます、此法を行ふに一の口傳がある、其口傳を聞くと誰にも容易に行はる、口傳の眞髓は腕力を以て爲すにあらずして、靈力を以てすることである、其靈力を如何にして發動するかは、紙上には記し難い、實地に研究を要します、普通には精神を統一して行へば相當の奇象を現出します。

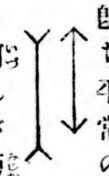
靈力の作用

第八章　覺醒時錯覺術

催眠術に罹つて居る人に對しては、枕が猫に錯覺し、水が麥酒に錯覺するの類は既に世人の熟知する處で珍らしくないが、此處に行ふ錯覺は覺醒狀態

物を見誤る例

即ち平常の狀態にある人に對して錯覺を起さしむる方法である、先づ術者



圖の如き二本の横線の圖を示して、其二本の横線の内何れが長く何れが短きかと列席者に對して問ふと、列席者一同一樣に長く見ゆる左方の線を長しと云ひ、短く見ゆる右方の線を短しと答へるを常とす、然に豈計らんや尺度を以て之を計り見ると、長しと見えし方が毫も長くない、即ち列席者一同の眼は錯覺を起したのである、此外之に類する錯覺の圖は心理學書に數多あるを以て參照せられたい、今其一二を擧ぐれば線と線との間が廣いと見えたのは實際に於て狹く、狹いと見えたのが却つて實際は廣いのである、或は亦或線が前方にあるか後方にあるかを決定せんとして之を熟視するに、如何に考へて見るも之れが判斷に苦しむのもある、是れ即ち覺醒時に於て吾人の眼は錯覺を起して、正確に看破れない實驗的證明である。

次に皮膚の感覺に就ての錯覺の實驗を述べませう、術者マッチの棒數本を持ち列席者中より被術者たることを希望する人をして眼を閉ぢさせて後、被術者の腕に其棒三本を並べて揃へ同樣に輕く壓し當て、何本當て居るや

を尋ぬると被術者は一本と答へるを普通とす、是れ即ち感覺の錯誤にして、三本が一本に感ずるのが普通である、又他の被術者に就て術者の持てるマッチの棒數本を被術者の腕に接觸して幾本なるやを當てしむると、被術者は其數を誤りて思はず傍觀者をして大笑せしむるものである、此現象の理由は心理學上錯覺の實例の一にして、別に珍らしき事に非ず、彼の繪畫の如きは此錯覺の原理を巧に應用したるものである、繪畫は勿論平面の紙上に描きたるものであるのに、遠近あり高低あり、眞に迫りて見ゆるは實に此理の應用である、此原理の說明としては、見るのに眼筋を多く使用して居る者は大きく見え、之に反する者は小さく見ゆるのであると說明して居る學者がある、皮膚の感覺の實驗は同一神經の上に數本が同所に同樣に觸るゝ故一本に感ずるのであると說明して居ります、が其當否は諸君の判斷に委します、私は眞に靈力の發動にて自己の觀念の儘に、三本を五本に、五本を二本に、被術者の感覺を左右することを得たことが多くあります、又圓形の物品を四角に見せ、輕き物を重く感ぜしむることは靈力の働きで自由であります。

第九章　刀劍刃止術

先づ刀劍を持ちて机上に置き、其刀劍を取りて拔き放つと、明皓々として夏尚寒く、半紙を折りては切り又重ねて折りては切りて、確かによく切れる銘劍なるを立證し、而して後に術者合掌して、神を祈り此刀劍は切れなくなつたと強く信念する、然ると實際切れなくなる、切れなくなつたことを確かめる方法として半紙を切つて見るに、確かに切れない、眞に切れなくなつたれば、術者自らの腕を露はして刀劍の刃にて腕を打ち、又は腕を刃にて引くも少しも切れないものである、次に其刀を己の頰肉に當てゝすつと引くも、少しく傷が附かぬものである、其刀を机上に置き、精神を統一して、此度は之にて病氣を癒すことを得ると觀念して、而して後に治療に之を應用するのである、治療法に應用するには、患者の痛む所、例へばリウマチスにて足の痛む患者なれば、其痛む所を露出せしめ、『之により痛みは消える』と唱へながら、其銘劍の刃を以て患部をぽんぽん叩くと、患部は何等の傷を見ずして、痛

銘劍直に鈍刀となる

刀劍療法

みは忽焉として消え失せるものである。

此方法を行ふ刀劍は銘刀にして、よく切れる刀劍程效果が著しいものである、其れを傍觀して居る者は鋭刀を皮膚にあてる際、戰き怖れ顏色を變へる人もあるものです。

又刀劍二本を刃を上に向けて動かぬ樣に枠を取り附け置き、其上に跳足で直立することが出來る、其場合に足は刃の上に置きたるまゝ、足を動かぬ樣に注意しつゝ、靜かに立つのである、確かに立ち終らば、別の刀劍を採りて其刃にて己の頰を引いて見せたりすることが出來る、其際足を少しにても動かしてはならぬ、足を動かすと足が切れます。

刀上に立つ實驗

刀劍が斯くして切れないのは術者の精神統一されて居り、少しの恐怖心もなく、靈力の作用で行ふのと物理の作用にて單調に刃が皮膚に觸るゝ故である、故に普通の刀なれば誰にでも行はれます、靈力家の刀にては危險です、或人其れは誰にでも出來ることで、靈力でも何でもないと嘲る人がある、併し私は誰が如何なる術を施しても、刃が皮膚に觸るれば必ず忽ち切れる刀

物理のみでは說明不充分

剣とすることを得る秘法を知つて居ります、刀剣を切れる様にすると一寸觸れても必ず切れる、又如何なる名刀でも切れなくすることも自由である、切れる様にして置いた刀は單調に輕く打ち又引けば切れぬなどと輕信して皮膚に觸れたら、飛んだ失敗を致します、切れなくするのは刃を潰すのではない、切れる様にするのは刃を立てるのではない、之が大秘傳であります、故に豫め半紙を刀に當て試み、半紙の切れぬを確かめて、後に人體の皮膚に觸るれば決して間違ひはありません。

第十章　靈媒普蘭術

プランセットの不思議

普蘭節士と云ふ機械がある、心臟形の小形の小面に車附二個の足と鉛筆とにて三脚をなす、此の普蘭節士と云ふ、言葉は小間板と云ふ意味にして、精神研究會にては米國のライター及びセルチョウ會社製造の者に少しも違はぬ様に模造して賣つて居る、先づ机上に半紙を敷き、其上に此機械を載せ、其機械の上に術者手を載せ居る、其器は動きて其器の一脚をなせる鉛筆によりて、紙上に線又は書畫が記さるゝ、其線又は書畫により、過現未の事を判斷するのである、私は或時プを實驗するに當り、傍觀し研究せる人々に向つて、諸君の内誰でも過去の事、現在の事、未來の事、何事でも見てあげますから、希望の方は申し出でられたしと云や、一人進み出で、私の過去を見て下さいと云ふ、私は直ちにプに尋ぬるとプは自動的に動いて紙上に怪しげな文字を書した、其を判斷して讀めば『十五歳の時父を失ひ、十七歳の時に火難に逢ひ、二十歳の時に學校に於て優等賞を得た』とある、見て貰つた人は自分の過去が少しも違はずに適中したのに驚いた、又一人進み出で『現在卽ち今自分の主人は病院に入院中であるが、其容態は如何であるか』と尋ねて

過現未を豫言する具

不思議の適中例

と云ふ、依つて之を、プに聽くと、プは『今黄泉の客となつた』と明示した、直ぐ病院に電話をかけて照會したるに、プの明示した如く『今死んだ』との返事を聞き、一同顔を見合せて驚いた、又未來の豫言を請ひたる人があつた、卽ち明日明後日の米相場を尋ねた、其答に『明日は上り』『明後日は下る』と答へた、後日新聞に出て居る米相場表に照し合せて見たら、果してプの明

ブが書畫を現はす

示した如くであつた、又『死んだ父の機嫌を伺うて呉れ』と云ふ人があつた、術者ブに手を載せるとブは直ちに動いて『汝の健康を喜ぶ、文庫倉の床下に金埋てあり』と現はれた、其人後日自己の文庫倉の床下を掘り探したら、果して金の入り居る壺を發見した。

以上はブの豫言適中の一例である、ブに歌を作らせ、詩を作らせ、畫を書かせ、書を認めさすことも出來る、死んだ人、又生れぬ前の人の消息を聞く事も出來る、尙未來の事卽ち前途出世するか如何の問題を占つて良く適中したる實例は澤山ある、或日ブの實驗を見て居りし傍觀者の一人大に疑ひ『私の生れた日を見て下さい、當れば五圓あげます』と云ふ『私は五圓許りの金ではブを馬鹿にした話である、玆では學術上の參考として行ふのであるから、無料で見て上げます、若し多少なりと金で謝禮をする意なら、少くも一回の實驗に百圓は出しなさい』と云ふや、其人赤面して『百圓でも三百圓でも當れば出します』ブは動いて七月五日と明示した、被見者當らぬと叫んだ、ブは又動いて『確かに七月五日』と亦答へた、玆で其人曰く『戸籍は七月五日だが實際に生れた月日は六月十九日だ』と云ひ譯をした、列席者異口同音に其れなれば立派に的中せしものである、と云ふや其人赤面して姿を隱した、後其人は病を得て直ちに客死したと云ふ。

男女共同にて使ふ

ブは術者一人にて使ひ得るも、男女二人で使ふのを本則とします、亦男子のみでも、女子のみでも、男女混同しても、二人でも、六人でも、四人でも、使ふ事が出來ます、使ふ人はブの上に片手又は兩手を輕く載せて居れば、其人が自覺せざる潛在精神が其手を動かしてブに附隨せる鉛筆にて紙上に何者かが描かるるのであります、之をよく動かし得る人は、心の清い善人であります、心の曲がりたる邪心强い人が、手を觸れてもブは少しも動きません、故に此具は俗に心の清汚善惡を見現はす具とも申します、ブによりて死者の靈を呼び出して、死者の心を文字に現して貰ふと實に不思議によく當ることがあります、ブにて死者との交通をよく媒介し得る人は靈媒と云ひ珍重致します、ブを使うて不思議に適中したる、諸大家の意見を次に紹介しませう。

死者と交通

(一)他人の心を看破す(文學士村上辰五郎氏說)　**ブランセット**は唯動くのみ

正確なる實驗

でなく、何なりと詞を發すると之れに對する答がアリ〳〵と文字で現はるのである、そして過去及び現在の事はその書くことがよく當るのである、如何にも不思議である、從來の心理學では言はず語らず思想が他人に傳はるなどのことが出來るといふ所迄研究が屆いて居らなかつたのであるが、今ではそれが確かに事實であることが知られた、殊に此プによりて明かに之を知り得るのである。それであるから口で言はず言葉で語らないことは人には知れないと思ふのは、淺い考へである、口に出さず語りはせないでも、心に思ふことはプの實驗によれば直ぐに知れ得るのである、例へば甲なる人の年齢はプを取扱つて居る人は少しも知らないが、その甲なる人が自分の年齢を心に思つて居れば、直三十歳とか四十歳とか云ふ文字となつて出て來る、又乙なる人の鄕地をプを取扱ふ人は少しも知らないが、それが判る、神奈川縣下の人が東京に出て居つて自分の故鄕は何縣であるか當てよといへば、プを取扱つて居る人は少しも知らないが、神奈川縣といふ文字はアリ〳〵と出てくる、又丙なる人が『自分には子供が何人か當てよ』といへば、プは二人とか五人とかその子供の數を書くのである、如何にも不思議の如くに思はるゝが、こんなことはいつでもある。（讀賣新聞抄錄）

秘密な素破抜く

（二）新體詩を書いたり駄洒落を書いたりする（文學士久保良英氏說）　**プランセット**は時には周圍の人の惡口を書いたり、質問者を愚弄したり、又は歌や新體詩を書いたり、駄洒落を書いたりする事があります、勿論この書いた內容に就ては本人は少しも知らない許りでなく、本人は目を開いて其動く手を見て居ながら其字が分らないのであります、だから臆面もなく周圍の人の秘密を素破抜いたり、嘲弄したりすることであります。（婦人畫報第六十三號抄錄）。

（三）卽座に適當な歌を詠ず（文學士速水湛氏說）　**プランセット**を使うて居る中に突然左の如き和歌が記された『みやしろの軒端は朽ちて髮切りし女の繪馬の新しきかな』それから續々短歌が出る樣になつた、俳句も折々混つて出た、被驗者は他人の歌を讀むことはあるが、作つた事は全くない、歌を書く時屢々其題を提出して試みたこともあるが、卽座に其題に適切な歌を

詠んだ事が度々あつた、しかも其速いことは實に驚歎すべき程で、大抵筆を紙につけた上で題を出すのであるが、題を言つてから歌をかき初むる迄には殆んど考へる餘裕はない程で、時としては二十秒か三十秒位時間がかかる事もあるが、場合に依つては響きの物に應ずるが如く、題をいふと殆んど同時に筆は動き始め、しかも其書いた歌はよく題意に適つて居て、隨分むづかしい題でも直ぐに書く。（心理研究第一號抄錄）

（四）女となつて物を云ふ（文學博士福來友吉氏說）　問は試驗者の問にして答はプランセットの答へなり。　問――如何なる條件の下に目に見えざる者より通信を得べきか、甚だ滿足すべき程の結果なかりしも、プは動き始めたり。問――今プを動かしたるものは何ぞや、答――良心、問――宗敎とは何ぞや、答――崇拜、問――汝は誰ぞや、答――クレリヤなり、問――女なりや、答――然り、問――汝は曾て此世に生れし事ありや、答――否、問――住みたしと思ふや、答――然り、問――何時、答――六年と。（催眠心理學抄錄）

プが女となる

（五）戀女を當てる（東京中央新聞記事）　可笑しい話は下谷の小千代拍子に大熱々の番町邊の某紳士、新橋のある待合で綺麗首を集めてプランセットを占つてる、藝者紳士の好きな人は誰とやると、コツリ〳〵動き出して『こちよ』と出たから一同はドッと吹出したので、紳士は飛んだ所で油を絞られたと云ふ大滑稽が有つたさうだ。（中央新聞記事抄錄）

遠隔地の事を當てる

（六）遠隔の模樣を知る（文學士花澤浮州氏說）　或時孃は其親戚の事を知らんと欲し、其人の名を告げて『プランセット』に問ふた、某夜某村に其人の滯在せるか否かを以てしたりしが其答へは滯在すとあり、何處にありや『某旅館』『今何をなせるか』『恰も今晩餐を終へ帳場にて勘定をなし其甥と共に市街を散歩せんとす』と、其後孃は其親戚に遇ひ事の虛實を糺せしに實に其答への如くなりしと云ふ。

次に『プランセット汝の動くは術者の意によるか、又は無形の精靈なるか』と問ひたりしに『腦髓又は力、意志』と答へたり、『生ける人の意志か精靈の意志か』『力、精靈、夫人』『夫人の實名及び其字は如何』『ニウンハム夫人』『汝の名は何か』『唯、妻』。（催眠術敎科書中の自動の書記の一節抄錄）

(七)亡母と語る(外國語學校教授故平井金三氏說)　或夜の事一家團欒してプランセットをして居ると、プが『榮尾』と書いた、妻は此の字の何であるかを忘れて居たので私は『お母さんの戒名だよ』と敎てやり、夫れから尙ほも不思議だと思つて『お母さん何か云ふ事がありますか』と聞くと、今度は『私は他人に掘つて棄てられた』と書いた、夫れから又『今は何處に居りますか』と聞くと『墳の陽藪の傍申未に居る』と書いた其處で私は態々京都に行き寺僧と數々交渉を重ねた末、祖先在來の白骨を納めた甕を探すことになつたが、其時プの書いた方向を調べて見ると果して其處にあつた。(心象會に於ける談話の一節)

如斯不思議の實驗例枚擧に遑なきを以つて以下は省略します。

交靈術

靈力の發動

第十一章　卽感人體自由術

卽感人體自由術は、術者被術者の身體に對して何等有形的の法を行はず、卽座に靈力を感應せしめて人體を自由にする法で、術者は先づ直立して居り、列席せる人に對して『誰でも被術者たる事を希望せらるゝ方はお出下さい』と云ふと列席者中進んで自己の身體が如何になるかを試みて貰はふとして現はるゝ人多くあるものである、例へば甲、乙、丙、丁の四人一時に被術者たらんとして現れたりとせば、其四人を各直立せしめ置き、術者は其前六尺を距てゝ立ち、姿勢を正して精神を統一し、而して後徐に『諸君の身體は、手にても、足にても、胴にても、悉く私の云ふ通りになる』と云ひながら、被術者四人の手を順に各々上に持ち擧ぐると、被術者四人の手は各擧げた儘動かないものである、四人の手を順に下に下ぐると又同樣に下ぐる事、恰も蠟細工の人形の手を動かせば、動かしたまゝに止まつて居るが如くである、次に被術者四人に向ひ『諸君の身體を一樣に前に傾ける』と言語暗示をなし、其手眞似をなしつつ斯く心を集注すると、四人は一樣に其身體を前方に傾くるものである、而して次に『其身體は後方に次第に傾く』と言語暗示をなし、其手眞似をすると其手眞似の如く被術者四名の身體は一樣に後方に傾くものである、次

人體蠟細工の如くなる

突然手は動かなくなる

に『身體は眞直となる』と言語暗示をなしつゝ其手眞似をすると、四人の身體は其の通となつて元の位置に歸るものである、其の他總て身體は悉く暗示の儘に隨意となり、又不隨意となるものである、而して術者一、二、三、と云ひて、四人の肩を順に一つ宛叩くと、被術者は悉く平常の狀態に復するものである。

斯くの如く彼術者の手が術者の意の如くになり、身體が術者の手眞似の如くに成るが如く、術者の言語と手眞似とによりて被術者の精神を變へる事が出來る、此作用の應用で腦神經が衰弱せるものを强健とする事を得、意志薄弱のものを意志强固のものに變へる事を得、交際下手な者をして、磊落なる交際家とならしむる事を得、或は生殖器に障碍ある者をして健康に復せしむる事を得る事は確に行ひ得る所以である、此術を行ふには、術者は催眠術を最も深く研究し置く必要があります、而して被術者の感性を看破して此被術者には、之れ之れの法にて斯くの狀態になると見込を付け、さうして術者は個人の精神を沒却して宇宙精神と同一融合したる境に達したる時

精神療法家の眞の實力

に此術を行はば、必ず自在に人體を自由にし得ます、此術を何人にも行うて百發百中に失敗なき樣になれば、其人は精神療法を行ひ得る實力が確かに具備した人と申しても過言でありません。

第十二章　鐵棒屈曲術

鐵棒飴の如く柔になる

先づ机上に數本の鐵棒(普通は火箸を用ゆ)を置き、術者其鐵棒を採りて『此鐵棒は斯の如く堅牢である』と云ひつゝ其鐵棒と鐵棒とを叩いて見せ、尙列席せる研究者の手に其鐵棒を渡して確に堅い鐵棒であるを認めしめて後、元の机上に置き、術者瞑目して深呼吸をなし、精神を統一して、此鐵棒は容易に曲る、と堅く信念して後に其鐵棒を採り上げ、右手にて其一端を握りて支へ、右手の小指を以て鈎となし棒の他端へ懸け、エイッと云ふ氣合と共に其右手を强く早く引くと共に左手を突く、と鐵棒は恰も柔かき飴の如く屈曲するものである、次に他の人鐵棒を採り術者の喉に鐵棒の中央を當て、鐵棒の兩端を堅く兩手にて握り、エイッと云ふ氣合と共に强く壓せば、鐵棒は

喉元で鐵棒曲る

喉元により曲りて輪となる、最初は細き鐵棒より始め、次第に太きものに及ぶを順序とす、物理現象によりて己の力相應の細い鐵棒を曲げるのは何でもないが、己の力より數倍の力ありても曲げるを得ざる太き鐵棒を曲げ得るのは確に靈力の作用と言はざるを得ない、精神統一の結果偉大なる力が現れて、容易に斯く鐵棒をも曲げ得るのである、此作用を病氣治療に應用すれば、重病も確かに治ほる、此精神作用を日常の業務に應用すれば、實に偉大の事業をなし得る所以である。

人體橋となる

去り乍ら曲りし鐵棒を元の如く眞直に直すことは曲るよりも困難である、依て曲りし鐵棒を元の通りに眞直にするには、金槌の力を藉りるのが近道であります。

第十三章　人體架橋術

實驗場に椅子三脚を二尺位宛隔て並べ、其上に被術者を仰臥せしめ、氣合をかくれば其身體は強直して材木の如くに成り、中央の椅子を除くも椅子と

人體橋上に數名直立す

椅子との間に人體は橋となり居る、其上に大人が起立する事が出來る、之は被術者に催眠を施さずして行ふのである、故に此法は深い催眠狀態にて行はるゝ強直狀態とは、大に趣を異にして居る、先づ椅子三個並べたる上に被術者を仰向けに横たへ、一端の椅子には頭を支へ、中央の椅子には腰を支へ、他の一端の椅子には足を支へしめ置き、被術者の手を堅く握らせ、足に力を入れさせ、息を吸入して下腹部に力を入れしめて、身體は棒の樣になつたと強く觀念せしめ、而して術者は『私がエイッと云ふと、君の身體は一層堅く棒の樣になる』と暗示し、エイッと氣合をかくると被術者の身體は強直する、而して中央の椅子を除くと被術者の身體は頭と足の先きとにて椅子と椅子との間に橋に架した狀態となる、其人橋の上に三人位直立して手を開き萬歲を叫ぶも被術者の身體には何等の異常もないものである、腹上の人降るや椅子を人橋の中央に挿入し、術者は被術者に對して『私が拍手を三回すると君は目を開き一人にて起き上る』と暗示して、其の如く拍手を三回すると被術者は目を開きて起き上るものであります。

直立強直の法

又一法あり術者は被術者を直立せしめ手足を堅く振らせ置き『私が強烈なる氣合をかけエイッと云ふと、君の身體は直ちに強直して後に倒れる』と云ひ置き、斯くすると被術者の身體は強直して後に倒れる、其時術者は助手と共に被術者の身體を手にて受け、擔うて椅子と椅子との間に橋に架け、其腹上に數名が代る代る立つも、少しも何等の異常もなきものである、然らば其被術者の身體を荷ひて疊上に平臥させ置き、術者が『私が一、二、三、と云ふと目を開いて、起きる』と云うて、斯くすると被術者は其暗示の如く目を開いて起き上るものであります。

四足形強直の法

又一方法がある、被術者を仰臥せしめ、兩手と兩足とのみにて胴體を支へ、四足形となし、空氣を深く吸入して下腹部に留めしめ置き、術者『私がエイッと云ふと君の身體は強直する』と暗示し置き、斯くすると其被術者の身體上に大人五名直立するも何等の異常なきものであります。

以上三種の人體架橋術は術者自身の身體に之を行ふも、被術者の身體と同樣の現象を呈出します、此理由は觀念の通りに肉體は變化すると云ふ原則の應用にして、觀念強ければ強き程其現象は巧に現はれます、一寸見ると此現象は不思議の樣であるが、行うて見ると存外容易の事であります。併し強直し架せる身體の上に大人一人二人位は一寸の觀念力のみにて載せ得るも其腹上に五名以上の人を立たしむることは、靈力の作用に非ずんばなし得ません。深い催眠狀態にある被術者に對して行はるゝ強直狀態は同じ強直狀態でも實に見事のもので、彼と此とは決して混同すべきものではありません、深催眠狀態にある者の強直狀態には被術者の自動行爲をば絶對に禁止することを得ます。

術者の身體輕重意の儘となる

第十四章　輕重轉換術

術者直立して居り列席に向ひ『何人にても來て私の身體を抱き上げて御覽なさい、私の身體は非常に重くなりたり非常に輕くなりたりするから試みて御覽なさい』と云ふ、列席せる研究者中より希望者出でゝ術者を後より堅く抱いて、擧げて見ると輕くフワリと上がる、次に二度び輕く抱き上げ

んとすると、今度は如何に全力を盡して努めても少しも上らない、他の研究者出でゝ術者の前より術者の身體を抱き上げんとしても大盤石の如くでビクともしない、次に二度抱き上げて見ると輕々と上る、之は精神の持方によりて身體の重量に變化を生ずるのである、即ち術者自身で我身は重くなつた誰が來て上げ樣としても上らぬと、確く觀念すると、其觀念の力で重くなるのと、物理の作用とを應用して、重量の中心點を變化さすのである、即ち後より抱き上げたるときは、身體を前方に稍傾け、前より抱き上げらるゝときは、後方に身體を稍傾けると重心を失して重くなり擧らぬものである。

少年大人以上に重くなる

又少年を術者の前に立たせ、少年の兩手掌に術者の指先を觸れると少年の重量重くなりて誰が來て少年を後より抱き擧げんとしても擧がらぬ、數名代る代る出で其少年を抱き上げんとして少しも上らぬものである、術者の手先を少年の手より放せば、少年の身體は輕々と擧る、之は三角術の應用で、術者の手先が少年の掌上に一寸觸れ居る丈けなるも、手は術者の身體より斜に少年の手掌に達し三角をなし居る故、術者の小力大力となりて、少年の身上に加はり居る故で之は物理の作用である、物理の作用と術者の靈力とが加りて少年の身體は重くなるのであります、又机の上に鐵製の小佛像を安置し、術者其佛像に向ひ經文を唱へたる後、被術者に向ひ『此佛像は重くなつて擧らぬ』と云ふと、被術者其佛像に手を掛け如何に汗を流して努力するも上らない、次に術者其佛像に向ひ『私が一、二、三と云ふと佛像は輕くなりて輕々と擧る』と云ふと、被術者其佛像に手を掛け擧げて見ると此度は輕くフワリと上る之は暗示の感應である、此現象の著しきものは催眠狀態中の實驗に於て現はるゝことは、世人の熟知せる所である。

佛像重くなる

茶碗重くなる

其佛像に代るに茶飲茶碗にても、急須にても、上らぬと云ふと上らぬ、此暗示に感應する被術者は、催眠狀態の第二期になる催眠感性を以て居るを要します、一度催眠せしめられし程度が第二期に進みしことある被術者であれば、間違なく必ず前顯の現象を自在に現はします。

第十五章　鳥蟲止動術

雞の止動狀態

机上に古新聞紙を敷き、鷄を其上に置くとは鷄はバタバタと荒れ狂うて逃れんとする、其を術者は捕へて横に倒して左手にて鷄の胴を壓へ、右手にて鷄の目を何回となく輕く撫でつゝ、此儘で居ると思念し、靜に兩手を鷄より離すと其鷄は横に倒れた儘動かない、其傍に於て拍手をなし大聲を發するも鷄は知らざる如くに靜止した儘で居る、其鷄を生氣附けようと思はゝ、術者指先にて鷄の胴を一寸突きつゝ起きよと觀念すると、鷄は起き上りて活潑に飛び廻るものである。

鳩と宮守の止動狀態

鷄に代ゆるに鳩を以てし念力を凝して一聲エイッと氣合をかくる、ともに横臥せしむると、鳩は其儘不動の姿勢となりをる、恰も剝製の鳩に異ない狀態を呈するものである、術者が指先にて一寸鳩の胴を突きて起きよと思念すると鳩は起き上つてチョコ〳〵と歩くものであります、鳥類は最も簡易に止動狀態となります、蟲類もよく此狀態を呈します、蟲類中東京によく居る宮守は最も感性高く自在に術に感じ、不思議の現象を呈するとは鳩よりも容易です、止動にする方法は鷄に對してなしたる法を準用するのです、又猫に對しても行はれますが、普通は感じ難いものです、獸類ではモルモットが最もよく感じます、モルモットは溫順の獸類故暴れても人を害することなき故、初學者の稽古的實驗用として適して居ります、練習が積むと猛獸にも毒蛇にも自在に感應せしむることが出來ます。

獸猛に感應

肉體痛みを知らなくなる

第十六章　剛膽不死身術

術者直立して瞑目し精神を統一して、己の身體は無感覺になつたと強く觀念すると、其觀念の通りに無感覺になる、其證として術者が『私の耳を力限に捻れても關はず強く力を込めて引いて御覽』と云ひて何人に耳を引かしむるも少しも痛みを知らぬものである、然らば次に術者が『何人にても私の腕を強く捻つて御覽なさい』と云ひ、列席者をして術者の腕を力限り捻らしても少しも痛まぬものである、其觀念法としては術者は自分の肉體は無きものと思うて居ると、肉體を如何にせらるゝも痛まないのである、又我肉體は無機物であるから如何にされても痛みを感じないと強く觀念し

麻醉藥代用の觀念法

てゐると、其觀念の通りに少しも感じないのであります、其際に觀念不充分にして、多少痛みを感じても、氣にかけずして居ると終には痛みは全く感ぜなくなります、尙進んで修養を積むと捻らるゝ程快感を感じて參ります。

此術を痲醉藥代用に應用すると無痛に否却つて愉快に外科手術を終る事が出來ます、此實驗と反對に火の附き居らぬ卷煙草の吸口を以て、術者自身の腕に觸れ今火を觸れたから熱くて火傷すると强く觀念すると、其觸れた所は見る〳〵内に火傷となり水泡を生ずる、其水泡を列席者に示すると、之を熟視したる人は一驚を喫するものである、而して術者は此水泡は忽ち消へると觀念して、一二分嘶をして居り後に二度び其腕を露出して前の水泡を見ると、先程の火傷は消えて少しの跡もなくなりて居るものである、今度は卷煙草は愚か棒を以て强く腕を推しても何とないと觀念すると、今度は何を以て强く壓しても何ともない、觀念の働きの偉大なる實に驚くべきである、只觀念によりて斯くの如く肉體が變化するのであるから、膽力は剛健になつたと强く觀念すれば、眞に膽力が剛健となり、火でも鐵砲でも何でも

剛健の精神

持て來いといふ剛健な人となり、此世に恐ろしい、怖いものは何もなくなりて、眞の偉大のことを爲し得ます、病氣位は當然癒し得る所以である。

熱湯中に手を入れる

第十七章　熱湯入手術

釜に湯を沸かしぐら〳〵と煮えたゝせおき、術者湯に向ひて姿勢を正し、目を閉ぢ精神を統一し、此の湯は熱くない、冷たい決して火傷はせない、と强く觀念し榊の葉を湯中に入れ、湯を浸し己の額に當て試み、眞に熱くなく火傷なきを確かめ、次に術者は袖を捲くり腕を露出して、精神無我となると共にエイッの氣合をかけつゝ湯の中に手を突入れるも、其の手に少しも異常がないものである、又白衣を着し居りて榊を澤山束ねてをき湯に浸しては頭より之を被り、又浸しては被ることを數回なすも何等の異常を認めないものである、又鐵瓶の湯を手掌に注ぎ盛りて飲むことも出來ます、此實驗を行ふときは、術者は神を念じて精神を統一して無我の狀態となり居り、此熱湯は少しも熱くないと堅い觀念を要するは勿論であるが、熱湯中に手を入れ

正邪判別の法

る時は極めて、迅速に電光石火の如くに早く入るゝことが肝要である、愚圖愚圖行ふと火傷をします、練習が積むと釜の中に茶碗數個入れ置き、其茶碗に湯を一杯に盛りし儘、取り出す事が出來ます、又茶碗を數個入れたり出したりすることが自在に出來ます、單に物理的の考へのみでは、人間の皮膚は或溫度の熱湯に觸れば傷を生ずる筈であるに、物理を超越して何等の傷を生ぜざる所に靈力の作用が加はつたのであると認めざるを得ないのであります。況んや湯が冷たく感ずるに於てをやである。

大昔惡事をせしか否かを判斷する法として、熱湯中に手を入れて試みたことがある、之は我國歷史上著名の事實である、卽ち心の淸き人は熱湯に入手するも、神明により何等の害なしとの確心により、實際何等の害もない、然るに心に邪ありて神明を恐れる人には、眞に害が其身に及ぶのである、畢境は觀念通りの結果を得るのである、假令顯在精神にては、何に何の事があるものかと、良心を打ち消さんとしても、眞に惡事をなしたる者は、惡事をしたことの潛在觀念が働いて恐怖心を起し、終に顯在精神及び肉體を動かして、曾てなしたる惡事通りの結果を現はすのであります。

第十八章　熱鐵扱術

熱鐵皮膚に觸る

鐵火法に種々あり

火鉢に炭火を燃やし置き、其れにて鐵棒を燒いて赤熱し置き、赤熱せる棒を採りて、赤熱せる所に半紙を附すると紙は焰々燃えて火となる、其鐵棒の一端を左手に持ちて支へ、右手にて其棒を握り其握つた上を手拭にて堅く結び、握つた手は開けない樣にして置き、術者エイッの氣合と共に右手卽ち手拭にて結ばれたる手にて、赤熱せる棒を扱くのである、斯くして後に手拭を解き掌を開いて見ると、手掌に黑い跡を殘すを常とす、其手を湯にて洗ふて見ると、手は綺麗になつて少しも傷を認めないものである。

或人の行ふ熱鐵扱術は手にて扱くと手掌に火傷を生ずるも、湯にて洗へば療ると云ふ、又或人の行ふ法によれば、手掌に少しの色もつかぬやうに扱くといふ人があるが、是れは其術の行ひ方によりて、如何樣にでも成し得るのである、此術は一寸見ると非常に危險で何か祕傳があるかと思はるゝも、其

實は危險ではない、無念無想の境に達したる精神にて、大確心を以て容易に熱鐵を扱き得るとの信念一で行はるゝのである、術を行ふに當り最も研究すべき點は確に容易に行はるゝとの大信念と、扱く際に非常に早く扱くことである、極めて早く手が通過するにより、火熱が手掌に及ばぬ先に手が通過する故、何等の火傷もせないのである、靈的作用と共に物理的作用が加りて行はるゝのであります。研究が進むと靈力の發動によりて兩手で熱鐵を二つに折り取り、又は熱鐵を齒で嚙み切つた人もある。又熱鐵を以て己が前額上を打つことを何回ともなくして終に熱鐵をして曲げて仕舞ふ人もある。

初學者實驗法

初學者初めて此術を實驗せんとする時は、火箸を赤熱して置き、右手にて火箸を握り、左掌を開き其上に電光の如く速に觸れて試み、之を數回容易になし得、以て強い信念を得て、後に愈々前述の如く熱鐵を扱くと間違ひはない、又之を行ふ際に其場所の前後左右をよく見廻して、扱く時手が何物かに衝突する樣の事あると誤りを生ずるから、其點に深く注意する必要がある。

第十九章　掌上火焰術

掌上に火焰を立たす

術者机上に蠟燭數本とマッチとを用意し置き、其蠟燭をナイフにて短く數個切り置き、左手の掌上に其短き蠟燭六本を立てゝ之に各々火を點じ、其蠟燭が全く燃え盡るまで其儘になし置くのである、其時術者は瞑目して、深呼吸をなして少しも熱くないと觀念して居ると、熱くないものである、蠟燭を短く切るのは早く燃え盡す樣にすることゝ、實驗上必要なるは今正に燃え盡きんとする一刹那にあるを以てゝある。

掌上に火を置き熱くない理

次に蠟燭數本に火を點じ、其蠟燭を掌上に横たへ置き、焰々と燃え上らしめる、見る人は不思議に思ふが存外熱くないものである、此の術は諸術中最も完全に行ふには餘程練習を要します、尤も數本の蠟燭に火を點じて手掌に横に置き、燃え立たすことは少しも熱くないものであるが、蠟燭を短く切りて數本を手掌に立て火を點じ、其蠟燭が全く悉く燃え盡るまで其儘になし置き、今や蠟燭は全く燃え終らんとする刹那、觀念が弛むと火熱を感じて

火傷し赤く腫れ上る事がある、此術も極致は信念で決しく熱くないと確心する事が肝要である、又物理作用によりて火は上に立つ故、火の下方にある手掌は火熱を感ぜぬのであります、此術を一寸見ると實に危險の樣である が行うて見ると何等危險のないものであります、研究が積むと手掌を火鉢の代りにして炭火を盛吹いて熾火とすることが出來ます。

棒支術

第二十章　棒天狗術

術者直徑一寸五分長さ四尺位の堅固の棒を持ちて、術者己の手の甲を柱に宛てゝ開き、其掌に棒の一端を當、誰でも其棒を強く推して御覽なさいと云ふと、大力の人出て、其棒を力に委せて壓すも、術者の手には何等の感覺もないものである、術者は棒に押れて居る手をエイッの氣合と共に棒より自在に拔くことを得るが物理の作用にて手は痛くないものである。

次に術者其棒の中央を片手にて握りて支へ、誰でも出て兩手にて此棒の兩端を持ち全身の力を込めて棒を押して御覽なさいと云ふと、何人出でゝ其

棒を兩手にて握り押すも、術者は片手にて安々と倒す事を得る、之は物理の作用が主にして精神作用は從である、之を行ふ秘訣は術者は右足を前に蹈み出して、下腹に力を入れて精神を統一し居る、試驗者は兩手にて棒の兩端を握りて水平に押して來る、其れを術者は三角即ち試驗者の頭部又は足部に向ひて押すと小力にして大力の人を自在に押し倒すことが出來るのであります。

棒擧術

又術者棒の一端を堅く疊に押しつけ居る、其れを何人が來て其棒を持ち上げんとしても持ち上らない、次に試驗者が代りて術者が初めせし如くに力を罩めて其棒を疊に押しつけて居る、其れを術者が其棒の下端を持ち少しも力を入れずに樂々と其棒を自在に持ち上ることが出來る。

棒着術

又棒を試驗者に握らせると其棒は試驗者の手掌に堅く附着して離れぬ、如何に離さんとしても離れぬ、術者が一、二、三、と云ふと忽然棒は手より離れて落ちると云ひて、斯くなすと其通り棒はバタリと落ちる、棒は恰も天狗の如き妙な働きをなす、故に之を棒天狗術といひます、前述の棒着術は催眠現象

の一にして、全く精神的の者であるが、棒擧術棒受術は物理的の現象が主であります、尙此棒を以て種々神祕不可思議の諸術を行ふ事が出來るが、實地に就き研究せざれば了解し難き故爰には之を略します。

第二十一章　讀筋讀心術

ジョン博士の讀心術

最近我國に於て讀心術が盛んになりました、白耳義の博士ジョン氏が先年日本に渡來し、各地に於て其妙を示すや其れを眞似るもの各所に現はれ、次第に流行するに至つた、私は初めジョン氏の實驗を見、其巧妙なるに感心したジョン氏と試驗者とは片手を輕く握り、術者瞑目し居り試驗者が心で强く思ふことを直ちに動作に現はすのである、例へば見物せる數百名の中より何の人を伴ひ來たると試驗者が思ふ、と直ちにジョン氏は悟りて其人を伴ひ來る、其れが實に早い、ジョン氏の如く巧妙に行ふには餘程の練習を要しますが、少し練習すると不思議に實驗が行へます、先づ術者は列席者中の希望者に問題を考へさせて、其問題を紙に記さしむ、其紙を試驗者が見て心

列席者の意を知る

讀心術の有樣

に問題を覺えて置き、術者と片手を握り合て、試驗者紙に記してありし通りの問題を心にて强く思ふ、と其思ふ通りに術者は動作するのである、例へば甲所より椅子を持ち來て乙所に移すと云ふ問題であるとすれば、試驗者術者と手を握りて居り、試驗者は心で自ら椅子を持ち來ると强く思ふ、然すると其心が術者に通じて、術者は甲所の椅子を持ちて乙所に移すのである、而して後に、問題の紙を開いて列席者に示して的中を證明するのであります、椅子を甲所より乙所に移すと云ふ如き、簡單なる實驗は初學者にも直ちに成し得ます、簡單なる實驗成功したるときは、次は稍複雜せる問題を紙に認めしむ、例へば『某の椅子を運び來りて實驗場の中央に置き、傍觀者中の一學生を伴ひ出して、其椅子に寄らしめ、机上のコップを取り水入より水を注ぎて其學生に飲ます』と云ふ題であるとすれば、試驗者其問題の記しある紙を開いて見、試驗者と術者と手を繋ぎ試驗者斯く思念すると、其思念した通りに術者がします、此法を深く練習すれば、人の意志を自在に讀む事を得、之を日常の業務に應用すれば頗る妙である、且つ此實驗の原理は術者の精

讀心術の原理

神で試驗者の精神を讀むのである、と共に試驗者の心に強く思ひしことが其筋肉に運動を及ぼして握り居る術者の手に試驗者の心が試驗者の手の筋肉の運動となりて術者の手に感じ、術者をして試驗者が思ひ居る如くに感ず、感じた通りに術者が行ふとよく的中するのであります、故に此法は讀心術と云ふより讀筋術と云ふ方が適切の名であります。

讀筋は有形の行爲に限る

此法を行ふに注意す可き事は、試驗者の心に思ふ問題は強く觀念する必要がある事、又其問題は試驗者自身になし得る有形的行爲に限ります又術者の身體を離れし所の何かの物を取扱ふ事に限ります、例へば座布團を持つて座の一隅に置き、雜誌數冊の中より何々雜誌を選み出して、其座布團の上に置き、尙列席者某の懷中時計を採りて、其雜誌の上に置き、第三者に其雜誌を採りて渡すの如し、之は當然行はるゝことであります、之に反して無形の働き即ち術者に歌を唄はしむると云ふ類の術者の身上のみの働きのことは行はれません、又術者の片手にてなし得る行爲に非ざれば行はれません、術者の片手は試驗者の片手と結んで居る故であります。

眞の讀心術

術者と、試驗者の連絡は棒又は線を以て行はれます、熟練すると手と手とを繼がずして、術者と試驗者とは離れて居つても行はれます、離れて居て巧妙に人の心を讀む事が出來れば、商賣の掛引診察に之を用ひて便利であります。

手が觸れず離れて居りて行はるゝのは、思念の感通又は千里眼の現象であります、之を行ふ中に術者の心眼に試驗者の念じた問題があり〳〵とよく映るのであります、斯る域に達するには大に研究を要します、此域に達すれば問題は單に有形上の働きに止まらずして、思想問題にても讀心することを得ます、嚴正に云へば此域に達して眞の讀心術であります、手と手とを繼いで行ふのは、讀筋術と云ふ方が學理上正しい名であります。

第二十二章　靈力消燈術

机上に蠟燭を立て火を點じ置き、術者其前に直立して默想し、精神を統一して全く宇宙靈と合一したる狀態となるやエッイと一聲叫と共に靈力を送

氣合で火が消える

消燈の原理

金剛力

ると焔々と燃え居る蠟燭の火は忽然消るものであります、消えたら又點火し、又エイッと叫ぶと共に靈力を働かすと消る、何度繰返しても悉く消るものでありますが、併しどうかすると稀に消ない事がある消えないのは個人の氣と宇宙の氣とが合一せず、靈力弱かりし故であります、蠟燭の火に代ふるに燈火を以てするもよい、熟練が積むと電燈に對しても行はれます。此消燈の原理は術者の強烈なる靈力の作用であるが、多少は空氣の壓力の關係即ち物理作用も加はりて行はるものなるやも知れませんが、面白き研究題目であり、實驗の方法が簡易でありますから、讀者早速試みて御覽下さい存外容易に成功します、電燈又は瓦斯燈に對して自在は行はるゝ樣になれば確に靈的の作用による現象と云ひ得るを得ん。

第二十三章　金剛不壞身術

俗に大力を金剛力と云ふ、確乎不動の強い精神を養ひ、其精神の働きにて不思議の力を現す術を金剛不壞身術と言ひます。

雲居禪師の不壞身

昔日蓮上人が相州龍の口で、將に斬罪に處せられようとしたとき、日蓮は態然自若として靜坐合掌して南無妙法蓮華經を心に念じて居るや、首斬役人の振り上げたる刀刃は段々に壞れた、是は事實を誇張せし處あるも知れざるも、振り上げし刀を落すこと能はざらしむるは事實である、偉大なる靈力を具備せる日蓮の精神が凝結充實して、物心融合の統一境地に到達するや、其集念の絶大力は實に天地をも動かす大確信となり、首斬役人の手は痲痺して、斯る大奇蹟を萬世に貽したのであると思ふ。

又彼の雲居禪師が伊達正宗の聘に應じて、瑞巖寺に赴く可く弟子を一人連れて出た、所が途中で狼に出遇ひ、弟子は恐怖の極に達し、早速樹に登つたが、師は泰然自若として何の迷ふ所もなく、途上で坐禪をしてゐた、弟子は樹の上で戰々兢々として師を見て居る、と狼は師の周圍を嗅ぎまはつて居たが、何の危害も加へずに去つた、後で弟子は師に向つて、貴方は狼が恐くはありませんでしたか、と問ふや師は呵々大笑して、お前はまだ僧衣を着する資格がない、誰も一度は死ぬのだ疊の上で死ぬより飢た狼の腹を肥す

物我一體

が佛の慈悲ではないか、と其の確信は卽ち金剛不壞身である、兵戈も斫る能はず禽獸も害する能はざるものは唯此偉大なる物我一體の確信力である。金剛不壞身の精神狀態たる確固不動の信念こそ萬能力を發生する根本である、金剛不壞身の精神狀態となると其人には疾病もない、怨敵もない、何となれば疾病や怨敵は恐る可からざるものであると確信し、毫も氣に留ないからである、古昔より最も大偉業をなしたる人は、必ず神佛を信仰せる人である、信仰により不動心を養成して始めて眞に偉大の業を成し得たのである、信仰の極致は無懼不動心である、之が卽ち金剛不壞身術を體得する道程である。

大人を輕く擧ぐる法

金剛不壞身術の實驗として普通に行ふ所は、術者疊の上に仰臥し、兩手を兩側にし掌を上に向けて置き、其上に大人をして足を其掌上に當て直立さす、其登りし大人をば、左右に立ちたる二人の助手は其直立せる人の手を各左右より握りて、其登りし人が倒れぬ樣に支へる、斯くて準備成らば術者精神を統一し靈能を働かして其兩手を頭上に高く臥したる儘擧げると二十貫もある乘りし其大男を輕る輕ると上に擧げることが出來ます、

碁盤上げ

又厚い碁盤の前方の端一目の處を、兩手にて持つて輕々と盤面を傾けずに擧げたり、下げたりすることを得、熟練すると盤上に茶腕を置き、茶腕に水を盛り其水を溢さぬ樣に立つたり坐つたりすることを得ます、之は腕力のみではなか〳〵六ヶ敷い靈力を働かすると容易に行はれます。

指折術

又大力の人來りて術者の指先を握り、力を凝めて逆に折り曲げんとしても曲らない、是れは此點のみ實地に就き習はぬと分り難いが、畢竟は腕と腕と密接する故曲らないので、柔道の一種で三角術の應用と精神の作用とによりて行はるゝのである、卽ち此現象は物理的の關係が從となりて精神力が主となりて行はるゝのであります。

金剛不壞身術を習得して不動の精神强固なる觀念を養成し置き、日常の業務に之を應用せば、必や其人は偉大の事業を成し遂げ得るでありませう。

第二十四章　魔法振子術

西洋に流行せる術

英佛を初め西洋諸國で流行して居る魔法振子術は、机上にコップを置き、指環又は穴明き錢を絲で吊るし、その絲の端を指の先に卷きて指と指環又は穴明錢との絲の長さは一尺位にし、其指環又は錢をコップの中の中央に垂れて、出來るだけ少しも動かぬやうにして居ると、暫時にして其の指環は時計の振子のやうに次第に搖れてくる、其れを留めやうと努力しても止まらぬ、而も絲を吊るして居る手は少しも動かさない積りで居るのに、指環は動く、之はプランセット又は狐狗狸さんと同じ道理で動くのである、故に人によつて動き方の強さが異る、靈能備はりし人が之を行ふと非常に動き不思議な事には如何なる問題が出ても返事をする、稀には懷疑心強き人である、のに之を行うて、非常に動くことがある、之は其人の天性が之を動かし得る靈能を具へて居るからである、稀には信念強くてもよく動かし得ざる人もある之は天性で致し方がない。

知らぬ人の年齢を當てる法

此振子術は多くは術者自身で行ふのであるが、被術者に振子を持たせ置き術者が念力を以て其振子は回轉運動をすると念ずると、矢張り回轉運動を

何事でも明示する

する、左右に振ると念ずれば、左右に振る、又某氏の年齢は何歳と尋ねると、振子はコップの端を其人の歳の數ほど打て知らせる、又時間は今何時ですと、尋ぬると時計の鐘のやうにコップを打ちて時を知らせます、又大紙に假名文字を廣く間隔を置いて圓く排列して記し置き、振子をコップより出して其紙の中央に垂て居り、何か問題を出すと、其文字の方へ一つ一つ動いて行つて、返事を綴り出すことがある、此魔法振子術は西洋では實に羅馬時代からあつたのである、古代羅馬の所謂卜筮官なる者は、色々の方法を用ひて神の意志を伺つて居つたが、其方法中の一として大仕掛の魔法振子術を行ふて居つたさうである、卽ち卜筮官は文字を圓く排列した圓の中央に立ち手から鐵丸の附いた絲を垂らして神に御伺ひを立てるのである、古代羅馬皇帝の或る一人は、此方法で卜筮官から自分の後を襲うて位に卽かんとする奸臣の姓名を聞き、其奸臣を殺したと云ふ話が殘つて居ります。

第二十五章　物體靈動術

手を觸れずに物體動く

術者机上に木製の玩具を置き、其前に直立して居り、精神を統一して無我の狀態となるや、强烈なる靈力を發動して氣合を一聲かけると玩具は動く、術者の手が毫も玩具に觸れざるは、勿論目に見ゆる物體は何物も其玩具に觸れないのに玩具は確かに動きます、術者の靈動力は無線電信の發信機の如き作用をなし、空間を經て其玩具に影響を及ぼし、以て其玩具は動くのである、其玩具に代るに人を以てすれば、最も明瞭に之を立證することが出來る、即ち術者被術者を椅子に倚らしめ、置き、術者は被術者より數間放れたる處に直立して、靈動力のみにて、被術者の手が擧がると强く觀念すると、其手は擧がる擧し其手は下ると强く觀念すると其手が下る、其他被術者の肉體を種々思ふ儘に靈動力のみにて變化せしむる事が出來ます。

靈魂問題解決

此實驗は非常に有益の實驗でありまして、人間の靈力が肉體を離れて作用する事を立證する方法であつて、此實驗によりて宗教上に云ふ靈魂問題を解決する事も出來ます、靈動力が他人の肉體に及び影響する事は確實にして動かすべからざる事實であります、此理を應用して遠隔療法が行はれるのであります、併し靈動力で無機物を動かすことを得るのは頗る研究の價値ある問題であります、確かに靈動力にて木製の玩具は動く、然し其動くのは空氣の壓力又は波動が加はりて動くのではないか、即ち物理的の現象が加味して動くのではないか、は大に講究すべき好個の研究問題であります。

念動の原理

机轉術の不思議

第二十六章　圓机靈轉術

圓机靈轉術は一名机轉術と云ひ原語をテーブルターニングと稱す、夜間室內を暗黑にして其室の中央に圓机を置き、數名がテーブルの周圍に置ける椅子に凭り各々手をテーブルに載せ居り、何事にても尋ぬると其テーブルは右に廻り、或は左に廻り、或は脚を上げたりするのである、西洋に名高きユーサビア婦人は、圓机靈轉術に妙を得て居り、机は高く空中に舞ひ上り周圍の人は如何に手にて壓へて擧がらない樣にして居ても、或は擧がり或は廻りて止まないと云ふ、斯の如き顯著なる實驗は普通には行はれないが、一寸した實驗は誰にも出來ます、先づ圓机の周圍に六七人椅子に坐し、兩手を

机轉術の原理

机上に載せ兩手を各隣席の人の手と接續して置き、室内を暗くして占はんとする事、例へば翌日の天候を占ふのであれば、晴天ならば机は右に廻り、雨天ならば左に廻り、風あらば脚を上て知らして下さい、と口に唱へ或は心に念じて手を其儘机に手を載せて居ると、テーブルはグラ〳〵と右又は左に廻轉して、翌日の天候を豫言するものである、此現象はテーブルに手を載せて居る人は、動かぬ樣にと思ひ少しも動かさぬ積りでも各自の自覺に上らぬ、潜在精神が其机を動かすのである、即ちテーブルに手を載せ居るものが實際は動かすのであるが、自分の氣附かぬ潜在精神が動かすのであるから、其動いたのを見て大に驚くのである、之をよく動かし得る人は顯在精神を無想になし得る修養の積みし人である、換言すれば心の清い善人である、私は曾て此事を詳しく書いた書籍を出しました、書名は男女運命豫知術と稱し菊判百頁位の書であります、有志の人は同書を御覽下さい、轉机をよく行ひ得る精神修養をせんとする初學者は、夜の十二時後に、一人にて机に手を載せ、深呼吸をなし無念無想になる修養をすると早く上達します、修養積まば夜九時頃、燈を消して友人數名と共に行うて見ると机はよく動いて過現未の事をよく明示します。

紛失物の所在を知る法

紛失物の所存を潜在精神は知て居る

第二十七章　靈智靈覺術

靈智靈覺術は一名水晶凝視術と云ひ、原語をクリスタルゲージングと云ひます、先づ机上にコップを置き、コップには水を一杯に盛り置き、其前に術者は正座して神又は佛を念じつゝ其コップの中を凝視して居ると、其コップの中に見むと欲する問題の答が實物となりて現はるゝのであります、例へば此術にて知らむと欲する所の問題は、術者が昨夜錢入れを紛失した其錢入は何處に在るかを見むとするのであるとすれば、錢入れを紛失したる術者自身である、故に自身の潜在精神は良く之を知つて居るが、顯在精神は是を忘れて居り、其事を思ひ出されない、其紛失物と所在を知つて居る潜在精神が、顯在域に働き出し忘れし物を自覺に上さんとするには、顯在精神の活動を止めて、無念無想にするのである、術者コップを眺めて居ると、顯在精

神は無想になる、然ると潜在精神が働き出して紛失物の所在が幻覺となつて其コップの中に現はるゝのである、術者暫くコップの水中を眺めて居ると、精神統一して無念無想となる、然ると其水中に本箱現はれ、其箱の中に錢入が現はる、術者立つて本箱の中を探すと、果して錢入が水中に見えし通りに存在するのである。又他人の需により何事でも見て當る事が出來る、其實例を述ぶれば、依頼者の子息が出奔して行衛不明である、其子息は今何處に居るか見て下さい、と云ふ人ありたり、術者暫くコップの中を凝視して術者の精神宇宙靈と合致するや、コップの中に其出奔したる子息現はれた、即ち『御子息は體の細き人で山高帽子を被て居る、セルの洋服を着て今熱海の海岸波打際を逍遙して居る』と見えたる儘を語る、然ると被見者は傍に同行者の在否を問ふ、術者は水中を眺めて『同行者は居ない』と答へた直ちに熱海に行き調査したれば果して術者の答へた如くであつた。

他人の身上を知る

斯る實例は澤山にある、西洋にはクリスタルゲージングを恰も我國の八卦者の如くに商賣に行つて居る人がある、其れで相當に繁昌して居ると云ふ、

前例中の自己のなしたることを單に知るのは潜在精神の現はれであるが、他人の身上がクスタルゲージングにて的中するのは、千里眼的の現象が加はりて的中するのであると思ひます、初學者此術を修得せんと欲せば、先づ午前二時頃齋戒沐浴して衣服を改めて机前に正坐し、腹式呼吸を行ひ神を禮拜して心清かとなりし後に、コップの中を一回に二時間位眺めて居ると、問題が次第に現はれて來ます、之を毎夜行ふこと一週間に及ぶと、大概の人は靈能を發揮します、簡易に此靈能を發揮せんとせば尚其上に之が靈能に富める、術者の暗示を受くると早く成功します。

修得法

第二十八章　靈動寫眞術

念寫の方法

靈動寫眞術は一名を念寫術とも云ふ寫眞の乾板を暗室にて取枠中に入れたるもの、或は乾板をダースの儘、或は乾板を銀紙に包みたるものを持ち來て机上に置き、術者數尺又は數間を隔てたる所に坐し、其乾板に手を觸れずに靈動力のみにて書畫人物景色其他何にても意のまゝに撮影する方法で

靈力寫眞乾板に感ずる

ある、例へば西郷隆盛を撮影し呉れと云へば、術者は乾板に向ひ、無念無想の狀態となり、強く靈動力を働すと、西郷隆盛の像が心眼にあり〳〵と現はるゝ、其西郷隆盛の像に對して、尙强烈に靈動力を働すると、其靈動力凝て目にも見ぬ光線となりて、其乾板に撮影せらるゝのである、乾板が數枚重ねてあるときは、其二枚目にても、三枚目にても、希望の乾板に撮影し得るのであります、即ち第一枚目の乾板には字を寫し、第二枚目には人物を寫し、第三枚目には山水を寫す、等意の儘である、而して其れを現像して見ると、寫眞器械を以て人物、書畫、山水を撮影したと同樣に映つて居るのであります、之を實地研究せむとする人は、寫眞術を一通り學びて寫眞術の一班を心得て大概の物は鮮明に撮影し得る迄に上達し、而して後に之を實驗するのが順序です、即ち念寫の研究としては、靈力發揮の修養以外に寫眞術の一班を研究する必要があります。

科學超越の現象

靈力寫眞術即ち念寫の原理は、科學にては全く說明の出來ぬ現象である、故に科學者は之を否定し、心靈學者は之を肯定して居る著名の現象であります、故に學者は之に就き大に研究せられんことを切望する次第であります、寫眞術の一班を知らざる人が之を研究するときは、乾板の現像燒附は商賣の寫眞屋に依賴するに限ります、寫眞屋に現像燒附は依賴しても足りますが、乾板の現像燒附位は、自分でなし得る素養がなければ研究上不充分です。

千里眼研究の階梯

第二十九章　萬里眼透見術

萬里眼透見術は昔天眼通術と云ひし現象にして、遠方の事を一室に居り乍ら見たり聞いたりすることを得る術である、之を行はんと欲する術者は先づ無我の修養を積み、瞑目思念すると見んと欲する問題が、心眼に現はるゝ程度に修養し置かねばならぬ、其修養が積みたらば愈々之を實驗するのである、初學者が之を實驗する例を申すれば、試驗者がマッチの棒數本を人に見えない樣に握り居る、術者瞑目し精神を統一すると、術者の心眼に五本なれば五本と映ずる、然らば五本と答へる、試驗者手を開いてマッチの棒を衆人に示すと確に五本である、又一例を述べませう、試驗者名刺形の小紙に

西比利亞の狀況見えたる

數字を二三字即ち七八三と書き、之を封筒に入れ嚴封をなし、其封筒を術者に渡して其封筒内の數字をあてゝ下さいと云へば、術者其封筒を額上に乘せ瞑目し精神を統一すること暫時にして、七八三と答へる、開いて見ると正に的中してゐる、又試驗者懷中時計の時間を任意の時間に動し置き、其時計をハンカチに包みて机上に置き、此時計の針は今何時を示し居るやを當て下さい、と云ふと術者精神を統一すると、術者の心眼に一時五分と映ずる、依つて一時五分と答へる開き見ると果して其通りである、又西伯利亞に出征して居る、某兵士の狀態を見て下さいと云ふ、と術者之に應じて精神を統一すると術者の心眼に映ずる、其儘を語る、曰く兵士は西伯利亞病院に於て看護卒となり、今や負傷兵を看護中である、試驗者今何を嘶して居るやを見て下さい術者曰く「ナポレオン」は豪いと云うてゐる而して後日其試驗者西伯利亞の友人に照會したるに、其兵士が看護卒をして居ること及び其時の嘶が的中して居たことを確かめた、其他之に類して如何なる事でも知らんとすることを尋ねて知ることを得ます、此實驗をする時は術者は精神を無念無想となし、個人の精神は宇宙靈と合致する狀態となりて、初めて行はるゝのであります、其精神狀態となると、術者の精神は恰も鏡の樣になりて居り、

千里眼の行はるゝ術者の狀態

錢箱中に秘せる物體も、千里遠方の出來事も顯然と心鏡に影じて確然見ゆるのであります、又千里遠くの嘶も恰も無線電話で對話する如くに判然とよく聞ゆるのであります、之を深く研究し軍事上商業上等に應用せば、其世益や實に絶大でありませう。

八百萬神

第三十章　現神現佛術

或一種の宗教のみを信仰し居る人は、其宗教の神又は佛のみを祠りて祈るは當然なるも、一宗教に片寄らざる人は、神道、佛教、基督教、何神何佛を祠りて信心するも可である、私は一宗教に片寄らず、故に神道、佛教、基督の神又は、佛を初め八百萬神を治療室に祠て供物をなし、朝夕禮拜を怠りません、私が治療するときは其神佛の御前に患者と共に正坐し合掌し、閉目して神佛を心にて祈ります、其時私は『患者諸君心内に何事にても氣にかゝることがあ

らば、其れを心で神佛に告げ、又何か惡い事をしたと思つた事があれば、其事を神佛に懺悔して、今現に苦める所が靈顯に浴して癒る樣に祈りなさい』と云ひて斯くなさしむ、術者も亦精神を統一して被術者の病氣が癒る樣に祈る、而して患者一同に閉目せしめ深呼吸をなさしむ、術者もまた閉目して深呼吸をなし、術者の精神が宇宙靈と合一したる狀態になりしとき、豫て術者が修得せる催眠術を應用して其處に集りたる患者一同をして恍惚狀態にならしむ、患者は此世の事も自身の事も、何事も忘れて只神佛の御前に清き魂を置くのみで、穢れた肉體のある事を忘れて居る、其時に術者が『皆樣の心眼に神の御像が現はれる、現れたる其尊像に對して平癒を祈りなさい』と暗示をすれば、基督教の信者なれば基督の御姿が心眼にありありと現るゝ、佛教の信者なれば阿彌陀如來の尊像がありありと其患者の心眼に現はれる、又神道で天照皇太神を信じて居る患者であれば、天照皇太神の靈像が心眼に現はるゝ、然ると患者は合掌して其尊像に平癒を祈る、術者『神佛の御聲が皆さんの身體にかゝる』と云へば、其神又は佛の口より有難い

心眼心耳開かる

在來の神癒法

御聲が漏れて患者の心耳に聞える、と共に患者の身體の苦痛は皆消え去る、今迄永く苦しみ居たる煩悶は直ちに消え去ること、恰も春雪が旭に消えて跡も止めないが如くである、又今迄苦るしんでゐた痛みは消えて快活な愉快な人に代る、今迄意志が薄弱で小膽腑甲斐ないと思つた人が、非常なる意志の強い大膽なる勇氣ある磊落なる交際家に代つて居る、術者其時尙平癒と幸福とを祈る而して『皆樣が靜かに目を開いて御覽になると、病癖は除かれて居る』と暗示をする、と患者一同目を開き見ると暗示の如く患者は悉く今迄とは打つて變つた健康體の人に成て居る、然ると患者互に術中に神を見、佛の御聲を聞きし事を語り合うて、平癒を喜び合ふを常とする。

神佛の靈顯にて病を癒す法としては、從來守札を出したり、禁厭をなしたり、加持をなしたり、祈禱をなしたり、或は祟りがあると稱して、御除けをする、是等の方法は科學的の頭腦を以て居る智識階級の人に對して行ふも多くは信ぜない、爲に無効に終る故に最も智識階級の人に對しては前述の方によるのがよい。

神佛と幻視幻聽

果して然らば如何にせば斯る不思議の現象が現はるゝか、其れは催眠術の應用である、故に催眠感性の高き患者に對しては容易に此現象を現はし得るも、感性低き患者に對しては、最初の施術より突然此現象を起さしむることを得ず、感性低くして容易に感じ難き患者に對しては、豫備行爲として先づ神佛を應用して患者を催眠せしめ、以て感性を高め、而して自在に深催眠狀態となし得る樣感受性を高め置き、神佛の幻視、幻聽を自在に起す事を得る狀態となりたる後に、此法を行ふとよい、幻視幻聽とは云へ、其によりて確かに癒るとの確信を得さしめ、重病が根治せば、獨り其患者の幸福のみに止まらず國家の利益である、催眠感性低くして、如何にしても第二期以上に催眠が進まぬ患者に對しては、此法は行はれぬ、之は如何とも致し方がない。

第三十一章　結論

此書にて第一章以下本章に至る迄、順に詳述したる各種の術は、最も容易に、最も簡易に實習して見る事を得る樣に記述したのであります、殊に學說上の議論は殆ど省略しました、學說上の說明を充分にせんとすると、原語の獨語、佛語、及羅甸語等を用ひざればならず、然るに其れ等は一切省きました、又實驗の方法中、紙上に寫すことの出來ない微妙の事柄が多い、術者蘊蓄の高遠、運用の巧妙は親しく實地に就き、研究すると、紙上にては知り難い奧儀を容易に知る事が出來ます、彼の演劇の筋書を見ても、實演の妙味は尙之が幾百層倍なるかを知る可からざる如くである、上述せる諸術の記載も之と同じく、唯紙上に現はし得る大要に過ぎずして、實際に其諸術の現象を見之を研究したならば、其神變不思議なる事、學術上の好參考なる事、蓋し意想外でありませう。

紙上と實地の比較

濫用嚴禁

尙本書を終るに臨み、吳々れも注意す可きは、術者たる人は精神の修養に努むべきである、單に外形上の形式を眞似たるのみにて、精神の修養が積まぬと、術は巧妙に行はれませぬ、又實地敎授をするに當りても精神修養を積まざる山師氣味の人には眞の奧儀は決して傳へぬものである、奧儀を體得せむとせば先づ修養が第一である、精神の修養が積まずして術を行ひ、若し之

不德の酬ひ

れを人に見らるゝことあらば、其れを見られしが原因で却つて大不幸の人となるやも知れぬ、殊に以上に掲げし諸術は、輕忽に娯樂の意で行ふ樣のことありてはなりません、學術の參考として愼重に見聞せんとする人に非ざれば、絶對に示しても語りてもなりません、近來世人の智識一般に進み、勞働者番頭の如き人々本會に來りて之を研究する、其眞意を探ぐるに、單に個人の幸福とか利益とか云ふ小問題の爲めに研究するのでなく、何れも國家の爲め、社會の爲に盡さんとして研究するのである、との眞意を確かめ感心したること往々あります、又多くの人々は哲學上宗教上の疑問を解決せんとして爰に志したる人々あり、實に敬服すべきであります、患者にして少し位の醫書を讀み、醫師の治療を一回受けしのみで、最早我輩は醫師の行ふ法を覺えたから、醫師の業務を行ふことを得と妄信し、醫師を批評し、又は醫業をなさば如何、斯る人の批評と療治は實に危險である、之と同じく僅かに精神療法書を讀みしのみの人、一回精神療法を行ふのを見、又は一回受術せしのみで、最早我輩は精神療法を覺えた、明かに施術法を知つたと妄信して、其

無料の施術と有料の施術

術者を批評し又は患者を取扱はんか、實に危險である、若し斯る人あらば、其不心得を大に說いて、非を悟らしむるを要す、況んや無料で一回施術を受けしのみに於てをや、無料の施術を受けて有料の施術と同一のものかと思ふ愚者に至りては、言語同斷嘶にならぬ。

奇現象現出の實驗に於ても然りである、特に詐欺的の頭腦を以て、詐りて人の行ふ實驗を看て覺え、其れを眞似んとする人あり、斯る人に對しては心ある術者は直に其卑劣心を看破し、殊更に眞似をすると飛んだ間違ひが生ずる法を知らぬ顏で行ふて見せ、見たる人をして誤らする人がある、又正當に入會したる上に非ざれば、敎授すべきことに非ざる方法を、詐りに入會したいからとて尋ねて知り、知つて仕舞へば入會せぬ豫定で種々のことを質問する人がある、心ある術者には其人の腹の底がよく見え透いて居る、そこで術者は愚の顏付をして、其人に飛んだ事を敎授する、其敎授を眞に受けて、實地に試むることあらんか、終生浮ぶ瀨のない深海に陷ることがある、斯る事實ありしをよく耳にする處であるが、誠によくない事であると思ひ、爰に一

仁愛は幸福の基

修養奥儀

言した次第であります。又假令入會しても修養を積まぬ人には奥儀は決して敎授するものではない、其人が修養したる程度の法を敎授するに過ぎぬ、今後は之を研究せんとする人、此を敎授せんとする人は互に德義を守りて決して人に迷惑をかける樣のことをせず、敵を愛する心を以て、博く仁愛を施されんことを切望するものであります。仁愛は眞に其人を幸福の人とする根源であります、神樣は心の正しい人に幸福を與へて下さいます。

終に臨み一言申上げ度事は、以上に述べたる諸術に比して、幾億萬倍奇絶妙絶なる奇現象數多を私は目下講究中でありますから、其新現象を諸賢に御噺する時期一日も早く到來せんことを急ひで居ります、諸賢は熱心に一句も見落すまじと御覽被下しことを深く感謝し、諸賢の御健康を祈りて擱筆します。

靈力發顯術　終

大正九年十月廿二日印刷
大正九年十月廿五日發行

著作兼發行者　東京市芝區琴平町三番地　古屋景晴

印刷者　東京市麻布區本村町十八番地　中野鎺太郎

印刷所　東京市芝區愛宕町三丁目二番地　東洋印刷株式會社

不許複製

發行所　東京市芝區琴平町三番地　精神研究會
電話新橋一、八七五番
振替口座東京二三五一番

初學者に最適の大珍書

古屋鐵石先生著　四六大判壹百八十五頁　定價送料共金壹圓六錢

男も女も讀め

秘密獨習・成功確實・女催眠術・色魔禁讀

●口繪　女催眠術家が不思議の實驗をなしたる處の寫眞版數個挿入

著者多年研究の結果最近の發見になれる進歩せる催眠術を婦女子と雖も秘密に自宅にて獨習し、精神療法を行ひ得る樣簡易に秘訣を講述せり、自身又は家族の中に人に話せぬ煩悶に惱める者、藥物無効の病癖に苦める者あらば試みよ、殊に精神の慰藉と人格の修養とに力を殘ぎ婦女子に關する面白き問題を解說しあり、讀んで面白き事不思議なる事小說以上なり假名附故小學卒業の學力にて讀め實行し得る

此催眠法は彼術者を神道に云ふ神人合一、佛教に云ふ眞如法性、基督教に云ふ見神の狀態となすにあり

二

精神療法講義錄　第一輯　目次

催眠術療法　（一）精神療法とは何ぞや（二）催眠術療法とは何ぞや（三）催眠術療法家に必要の無我修養法（四）催眠術療法で癒る病氣（五）催眠術療法診察法（六）催眠療法を行ふ法（七）催眠術療法受術者修養法

暗示術療法　（一）暗示術療法とは何ぞや（二）暗示術療法練習法（三）暗示術療法を行ふ法

プラナ療法　（一）プラナ療法とは何ぞや（二）プラナ療法を行ふ法（三）プラナ療法の原理

靜坐呼吸療法　（一）靜坐呼吸療法とは何ぞや（二）藤田式靜坐呼吸療法（三）岡田式靜坐呼吸療法（四）古屋式靜坐呼吸療法

自己催眠療法　（一）自己催眠療法とは何ぞや（二）自己催眠療法豫備修養法（三）自己催眠療法を行ふ法

催眠遠隔療法　（一）催眠遠隔療法とは何ぞや（二）催眠遠隔療法の原理（三）催眠遠隔療法を行ふ法（四）催眠遠隔療法受術者修養法

精神療法講義錄　第二輯　目次

精神分析合成療法　（一）精神分析合成療法とは何ぞや（二）精神分析合成療法の原理（三）精神分析合成療法を行ふ法（四）精神分析合成療法の實例

舉證說得療法　（一）舉證說得療法とは何ぞや（二）舉證說得療法を行ふ法（三）舉證說得療法の模範例

心靈術療法　（一）心靈術療法とは何ぞや（二）渡邊藤交式心靈術療法（三）古屋鐵石式心靈術療法

心理療法　（一）心理療法とは何ぞや（二）心理療法を行ふ法

氣合術療法　（一）氣合術療法とは何ぞや（二）有心的氣合術と無心的氣合術（三）暗示的氣合術と心靈的氣合術（四）實驗的氣合術と療法的氣合術（五）氣合術療法を行ふ法

リズム療法　（一）リズム療法とは何ぞや（二）リズム療法家に必須の精神統一法（三）リズム療法を行ふ法

精神療法講義錄　第三輯　目次

人身マグネット療法　（一）人身マグネット療法とは何ぞや（二）人身マグネット療法の原理（三）人身マグネット療法を行ふ法

信仰療法　（一）信仰療法とは何ぞや（二）自力信仰療法の原理現象（三）他方信仰療法の原理現象（四）信仰療法を行ふ法

クリスチヤンサイエンス療法　（一）クリスチヤンサイエンス療法とは何ぞや（二）クリスチンサイエンス療法の原理（三）クリスチヤンの療法的奇蹟（四）クリスチヤンサイエンス療法を行ふ法

大靈道靈子術療法　（一）大靈道靈子術療法とは何ぞや（二）顯動作用を起さす法（三）潛動作用を起さす法（四）田中守平式靈子術療法（五）古屋鐵石式靈子術療法（五）新聞記者の實驗せる靈子術療法

哲理療法　（一）哲理療法とは何ぞや（二）鈴木美山式哲理療法（三）古屋鐵石式哲理療法（四）雜誌記者の批判せる哲理療法

靈智學隱秘敎療法　（一）靈智學隱秘敎療法とは何ぞや（二）靈智學隱秘敎療法を行ふ法

精神療法講義錄　第四輯　目次

神仙術療法　（一）神仙術療法とは何ぞや（二）神仙術療法を行ふ法

耳根圓通妙智療法　（一）耳根圓通妙智療法とは何ぞや（二）木原鬼佛式耳根圓通妙智療法（三）古屋鐵石式耳根圓通妙智療法

人身自由術療法　（一）人身自由術療法とは何ぞや（二）人身自由術療法を行ふ法

稼働無想療法　（一）稼働無想療法とは何ぞや（二）稼働無想療法を行ふ法

環境轉換療法　（一）環境轉換療法とは何ぞや（二）環境轉換療法を行ふ法

慰藉歡樂療法　（一）慰藉歡樂療法とは何ぞや（二）慰藉歡樂療法を行ふ（三）精神療法成功の秘訣

以上壹、貳、參、四輯各册平均價金壹圓と金壹圓七十錢の二種あり　但新領土貳割增　外國倍增送料不要

精神療法講義錄第五輯　古屋鐵石講述（菊大判總頁數壹百有餘頁五號活字總振假名附珍本）

通信教授

靈力發顯術

價郵共金壹圓、送料不要　但新領土貳割增、外國倍增、

本書講述科目の諸術に就き、簡易に何人にても一讀直に實行し得る樣に講述せり、本書講述の諸術は坊間に散在せる書籍の說明と全然趣を異にし、悉く靈力の發顯である、若し本書講述の諸術が物理現象と思ふ人、本書を讀み之を實現すると靈力發顯の不可思議なるに驚愕せらるゝなるべし（無料で施術を受け又は無料で諸術を見て大金を費されば覺えられぬ！諸術をロハで覺えんとする下心ある人は是非細讀すべき文字あり。）

獨習成功保證

講述科目

- 棒寄棒開術
- 紙刀棒切術
- 火呑火食術
- 人體刺針術
- 麻繩手斷術
- 人體輕飛術
- 覺醒時錯覺術
- 刀劍刃止術
- 靈媒普蘭術
- 卽感人體自由術
- 鐵棒屈曲術
- 人體架橋術
- 輕重轉換術
- 鳥蟲止動術
- 剛膽不死身術
- 熱湯入手術
- 熱鐵扱術
- 掌上火焰術
- 棒天狗術
- 讀筋讀心術
- 靈力消燈術
- 金剛不壞身術
- 魔法振子術
- 物體靈動術
- 圓机靈轉術
- 靈智靈覺術
- 靈動寫眞術
- 萬里眼透見術
- 現神現佛術

精神療法講義錄第六輯　古屋鐵石講述

通信教授

生靈死靈術

價郵共金壹圓、送料不要、但新領土貳割增、外國倍增、

大學校教授、博士、男爵、檢事、其他多くの心象學者、實驗に立會ひ、一點も疑ふの餘地なしとして承認したる、奇絕、怪絕、珍絕、妙絕なる生靈死靈の大珍現象を紹介したるもので、全世界に亙りて、之れ以上不可思議の事實なしと斷言す。

講述目次

（巾五寸縱七寸の菊判總頁數壹百有餘頁五號活字總振假名附珍本）

- 生靈死靈術研究の沿革
- 死後靈魂存續の證明
- 生靈死靈交換術
- 人體物體空間浮動術
- 靈魂世界現出術
- 幽靈飛動現出術
- 交靈遠視遠聽術
- 玄妙不可思議靈體術
- 靈力寢臺飛上術
- 肉死靈生阿修羅術
- 幽靈寫眞撮影術
- 男女精神交接術
- 遠隔者卽感術
- 男女思想傳達術
- 人體磁力術
- 摩訶靈怪鬼神術

悉怪絕

醫學士　志賀光明講述

世界無比珍象

附錄　西洋按摩術

精神研究會長　古屋鐵石講述

（菊大判總頁數壹百有餘頁五號活字總振假名附珍本）

靈怪展覽術

價郵共金壹圓、送料不要、但新領土貳割增、外國倍增、

古屋鐵石が、東京帝國大學校教授、華族、博士、政治家及び紳士淑女の會合せる席上で、靈怪の奇象を實驗展覽に供したるを、東京十大新聞紙上に於て紹介され、批評されたるものが即ち本書記載の事項である、此靈怪の學說上の理由は如何、靈怪現出の方法は如何、靈界に志ある人は、是非再讀すべき未曾有の大珍書也。

目次內容

◎社會百般解決の根柢……
◎反抗者を突然人事不省とせる術……
◎千里眼より不可思議な現象……
◎精神感應の奇象……
◎目隱者諸物を當てる實驗……
◎目笛を不覺人の狀態とせし術……
◎覺醒不能の失神狀態……
◎眠中月琴を彈き唱歌を唱ふ實驗……
◎無學者を書人に書く實驗……
◎奇術と格變換の實驗……
◎無藝者有藝者となる實驗……
◎新聞記者の見たる實驗室の有樣……
◎珍妙なる施術の有樣……
◎牛忽然手腕直の現象……
◎一枚の重量百貫目に感ずる實驗……
◎不可思議なる精神感應術……
◎忽然人を不覺狀態とする實驗……
◎骨相判斷百發百中の實驗……
◎咳拂で人を催眠さす實驗……
◎妙奇不思議の現象……
◎人間高孤に變換せる實驗……
◎公開せる古今無比の大實驗……
◎人間螺旋の火事に變換せる實驗……
◎遠方の豫言せる實驗……
◎犬が狐に變換せる實驗……
◎家康に變換せる奇象……
◎日本人支那人に、文那人獨逸人に變換せる實驗……
◎無學者即ち詩歌を作る實驗……
◎一瓶力ヴアイオリンを彈奏の實驗……
◎一聲で深山の狀態となす實驗……
◎靈的判斷眠狀態となす實驗……
◎身上の花節の實驗……
◎易者の施術の變換せる現象……
◎學牛臣の強直の有樣……
◎百面相自在に變換せる現象……
◎神秘の實驗……
◎千里眼思議の適中例……
◎中央新聞社依頼の千里眼……
◎千里眼實行の顚末……
◎千里眼的中の顚末……
◎男女優に變換せる實驗……
◎學生に變換せる實驗……
◎墨鶴忽然靜止する實驗……
◎鶴犬に變換せる不思議の現象……
◎拍手で深催眠狀態となす……
◎ヒステリーに大効ある療法實驗……
◎ヒステリーの顚末……
◎病人秘密の陳述……
◎女學生を實驗せし顚末……
◎醜貌美を變貌に變ずる療法……
◎靈術師の大實驗……
◎眠中俗謠を唱ふ實驗……
◎世界無比の奇現象……
◎即問答諸藝の演出……
◎即結聽者を醉すの實驗……
◎神經衰弱者を必治療法……
◎神經衰弱治療室の模樣……
◎千里眼不思議の適中例……
◎中央新聞社依頼の千里眼……
◎千里眼實行の顚末……
◎千里眼的中の顚末……
◎男女優に變換せる實驗……
◎學生に變換せる實驗……
◎墨鶴忽然靜止する實驗……
◎鶴犬に變換せる不思議の現象……
◎拍手で深催眠狀態となす……
◎ヒステリーに大効ある療法實驗……
◎ヒステリーの顚末……
◎病人秘密の陳述……
◎女學生を實驗せし顚末……
◎醜貌美を變貌に變ずる療法……
◎靈術師の大實驗……
◎眠中俗謠を唱ふ實驗……
◎世界無比の奇現象……
◎即問答諸藝の演出……
◎即結聽者を醉すの實驗……
◎神經衰弱者を必治療法……
◎神經衰弱治療室の模樣……
◎素人眼には病人と見えぬ大病……
◎千里眼思議の適中例……
◎中央新聞社依頼の千里眼……
◎千里眼實行の顚末……
◎千里眼的中の顚末……
◎男女優に變換せる實驗……
◎學生に變換せる實驗……
◎墨鶴忽然靜止する實驗……
◎鶴犬に變換せる不思議の現象……
◎拍手で深催眠狀態となす……
◎ヒステリーに大効ある療法實驗……
◎ヒステリーの顚末……
◎病人秘密の陳述……
◎女學生を實驗せし顚末……
◎醜貌美を變貌に變ずる療法……
◎靈術師の大實驗……
◎眠中俗謠を唱ふ實驗……
◎世界無比の奇現象……
◎即問答諸藝の演出……
◎即結聽者を醉すの實驗……
◎神經衰弱者を必治療法……
◎神經衰弱治療室の模樣……
◎素人眼には病人と見えぬ大病……
◎神秘的治療法の有樣……
◎諸技能超越せる奇現象……
◎北川軍醫の立會たる實驗……
◎千里眼的確の實驗……
◎身體硬直の實驗……
◎ヒステリーの妙療法……
◎重病人を突然に癒の實驗……
◎猫の身分離の奇象……
◎心間に失神狀態となす實驗……
◎瞬間の美女を奇怪の狀態とせる實驗……
◎千里眼透視の大實驗……
◎公私教授立會の實驗……
◎大學校の實驗……
◎神秘靈能奇象……
◎即口中點火とを入れる實驗……
◎雄湯に手足を折の實驗……
◎結中に入れる實驗……
◎神經衰弱人自由術の不思議……

精神研究會長　古屋鐵石講述

（菊判壹百有餘頁五號活字總振假名附）

靈氣大療法

價郵共金壹圓、送料不要、但新領土貳割增、外國倍增、（未刊）

講述者約二十年間、遠隔地に居る患者數萬人に就き、研究的慈善的に無料にて治療し、苦心慘澹の結果、發案したるは即ち人體より放射する靈氣である、此靈氣を以てすれば目前に在る重病人は勿論遠方に居る重病人も確に癒し得る。（僅か五六年の實驗や千や二千の患者を癒したに過ぎない薄べらな經驗にて首唱する間違誤謬の療法の類ではありません。）

術者は東京に居り數十里又は數百里の遠方に居る患者に術者の放射する靈氣は通じて患者の心身は術者の意の儘に、或は不隨となり、或は人事不省となり、或は惡癖消え或は重病癒ること實に術者の意の儘である、遠隔地に在る患者（患者の住所氏名を一々明記し實驗の正確を期せり）に對してさへ如斯大効あり、直接治療に之を行はゞ其効果の顯著なるや云ふ迄もなし、其實驗報告を掲載し、斯る靈氣を體得發動する修養法と施術法と、理論を述べ、誰でも斯る奇蹟を行ひ得る次第を講述せり。

講述目次

◎靈氣大療法とは何ぞや……
◎靈氣大療法直效……
◎靈氣大療法の効果……
◎神經病頭痛……
◎強迫觀念……
◎胃腸病……
◎腦神經衰弱……
◎薄弱記憶力減退……
◎等全治心身改造の實驗……
◎決斷力乏……
◎腦病……
◎大療法遠隔治療の實驗……
◎長吉……
◎不眠症……
◎術者の東京に於て長野縣に居る患者の腎臟病を癒せし實驗報告……

故　桑原俊郎講述

附錄　精神靈動術

◎術者東京に居り靈氣を鹿兒島市に居る患者に通じて天國に遊ばし重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り靈氣を茨城縣に居る患者に通じて不覺狀態となし重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り靈氣を通じて朝鮮に居る患者に重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り靈氣を通じて失神狀態となし重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り靈氣を感應せし實驗報告……
◎術者東京に居り愛知縣に居る患者に靈氣を送りて無我狀態となし重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り靈氣を通じて無我狀態となし重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り高知縣に居る患者に靈氣を送りて心身を變化せし實驗報告……
◎術者東京に居り岡縣に居る患者に靈氣を通じて腦神經衰弱を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り岩手縣に居る患者に靈氣を送りて無我狀態となし重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り德島縣に居る患者に靈氣を通じて感覺を左右し重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り長崎縣に居る患者を催眠せしめ重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り軍艦に坐乘せる患者に靈氣を感應さし重病を癒せし實驗報告……
◎術者東京に居り岩手縣に居る患者に靈氣を通じて眠遊狀態となし重病を癒せし實驗報告……
◎靈氣大療法術者の修養法……
◎靈氣大療法を行ふ方法……
◎靈氣大療法の原理……

●古屋鐵石先生述　上下貳卷完結（菊判總頁數貳百數拾頁五號活字總振假名附大珍本）

會員大募集

運命豫言術講義錄

●通信教授●全貳卷金貳圓●貳回分納金壹圓二拾錢宛新領土二割增●外國倍增●（分納者には壹册宛送り一時全納者には貳册一度に送る）

是非讀め！

高尚な職業を求む人
金滿家と成らんとする人
理想の配偶者を得んとする人
終生幸福ならんとする人

是非讀め！

運命豫言を行ふに單に或一法のみによりて決すると間違ひ多し各術を總合して判斷すれば百發百中疑ひなし。

以上の諸術に付奥義を公開せり、素人にても容易に獨習にて開業し得る實力を得せしむ、運命豫言術の開業は時世に適應し高尚にして收益多し、救世的に副業とするは最も妙也。志望者は責切ぬ中に速に入會せられたし。

講述科目

人相判斷術	九星術	天源術
顔筋吉凶術	淘宮術	墨色判斷術
黑子吉凶術	指紋術	
手相判斷術	家相術	
人心看破術	方位崇除術	
姓名判斷術	相場豫知術	

世界第一最良珍書 高等催眠學

掲載目次

●菊判總頁數壹千有餘頁●自第壹卷至第拾卷分卷壹册金六拾錢●自第壹卷至第五卷合綴上等製價金四圓●自第六卷至第拾卷合綴上等製價金四圓●新領土二割增諸外國五割增

第壹卷　歷史篇

口書寫眞版七個挿入

（一）緒言……
（二）催眠術の定義……
（三）催眠術と催眠術に非ざる者との區別……
（四）催眠術應用の範圍……
（五）催眠術の大特色……
（二）催眠術の歷史
（1）萬國に於ける催眠術の歷史……
（イ）大古時代の催眠術……
（ロ）宗教上の起原……
（二）催眠術の奇蹟と催眠術との關係……
（三）太古に行はれたる催眠術療法……
（四）古星術とは何ぞや……
（ハ）メスメル時代の催眠術……
（ニ）メスメル氏の履歷……
（ホ）メスメリズムとは何ぞや……
（三）動物磁氣の原理……
（四）眠遊狀態の發見……
（五）止動狀態の發見……
（六）無痛拔齒の濫觴……
（七）五官移轉の首唱……
（八）アッベフアリア時代の催眠術……
（一）動物磁氣說を打破したる豫期……
（二）ブレート時代の催眠術……
（二）疑視催眠の濫觴……
（三）初めて催眠術の名稱を附せし人……
（三）姿勢と感情との關係の發見……
（四）催眠術應用外科手術の元祖……
（ホ）シヤルコー時代の催眠術……
（一）神經病的說……
（二）金屬板療法……
（三）催眠治療具の發明……
（四）神經病的說の可否……
（五）神經病者と催眠者との酷似點……
（ヘ）ナンシー時代の催眠術……
（ト）暗示說の首唱……
（一）ビネー時代の催眠術……
（二）第二自我說……
（三）机轉術の原理……
（四）第一自我と第一人格との異同……
（五）催眠學を講義する歐米の大學校名……
（2）日本に於ける催眠術の歷史……
（一）日本の古代に行はれたる催眠術……
（二）日本にて初めて催眠術を行ひし人……
（三）催眠術は公私大學校の教科目となれり……
（四）日本に於ける催眠術書の淵源……
（五）著者が催眠術專門家となりしに動機……
（六）催眠術通信教授の元祖……
（七）催眠術弊害の有無講究……
（八）日本に於ける催眠術發達史上に特筆すべき大事實……
（九）鐵石時代の催眠術……

第貳卷　原理篇

口書寫眞版三個と木版圖五個挿入

（一）催眠術の原理
（1）催眠術の原理の分類……
（一）催眠術の原理は如何に分類すべきか……
（イ）哲學說……
（一）一元二面論以外の學說……
（二）二元論の哲學說……
（ロ）一元論の要旨……
（二）二元論の缺點……
（ハ）一元論の哲學說……
（ニ）唯物論の要旨……
（三）唯物論の缺點……
（四）唯心論の要旨……
（五）唯心論の缺點……
（六）絕對的唯心論の要旨……
（七）絕對的唯心論の缺點……
（八）人格的唯心論の要旨……
（九）人格的唯心論の缺點……
（ロ）一元二面論（平行的一元論）……
（一）一元二面論の要旨……
（二）催眠術の價値……
（二）一元二面論の原理としての一元二面論と催眠現象との關係……
（三）個體靈魂遊離說の要旨及び其駁論……
（四）精神波動說の要旨及び其駁論……
（五）絕對靈魂說の要旨及び其駁論……
（心理學を以て總ての催眠現象

…な說明せんとする說及び其駁論……
（六）物心平行說の要旨……
（七）心身平行と物心平行との差異……
（八）術者の精神力の強弱が被術者に對する影響に多少ある理由……
（3）科學說……
（イ）心理說……
（い）潛在精神說……
（一）潛在精神說の要旨……
（二）潛在精神と催眠現象との關係……
（ろ）聯想作用說……
（一）聯想作用說の要旨……
（二）感覺と運動との聯想……
（三）感覺と慾望との聯想……
（四）感覺と情念との聯想……
（五）觀念と觀念との聯想……
（六）聯想作用と催眠現象との關係……
（七）催眠者は潛在精神にて如何に聯想作用をなすか……
（は）暗示感應說……
（一）暗示感應說の要旨……
（二）暗示感應說と催眠現象との關係……
（に）豫期作用說……
（一）豫期作用說の要旨……
（二）豫期作用と催眠現象との關係……
（三）豫期と欲求との區別……
（ロ）生理說……
（い）腦少血說……
（一）腦少血說の要旨……
（二）腦少血と催眠現象との關係……
（4）上擧諸說の關係……
（一）催眠現象を哲學及び科學の兩說を以て說明し撞着せざる所以……
（二）催眠施法と原理との關係……
（三）催眠現象と原理との關係……
（四）學說の是非は絕對にあらざる所以……

（二）催眠狀態の性質……

（1）催眠狀態の性質を明にする必要……
（一）催眠術研究上第一番の必要問題は何ぞや……
（二）術者の一擧一動は悉く學理上の根據なかるべからざる所以……
（2）催眠狀態の學說……
（一）催眠者は如何に外貌が變化するか……
（二）深き催眠者の外貌は覺醒者の外貌と同じき事實……
（イ）心理學上より見たる催眠狀態……
（一）催眠者は暗示に感應し覺醒者は暗示に感應せざるは何故なるか……
（二）覺醒者は雜念ありて催眠者は雜念なしとの立證……
（三）雜念の混ぜる催眠狀態と覺醒狀態との區別……
（四）催眠狀態と覺醒狀態との區畫點……
（五）淺き催眠狀態を深き催眠狀態とする條件……
（ロ）生理學上より見たる催眠狀態……
（一）生理學上より見たる精神作用……
（二）大腦は如何なる働きをなすか……
（三）催眠者の腦は如何の狀態にありや……
（四）催眠の深淺を正確に知る事を得る器械……
（五）催眠者の脈膊と覺醒者の脈膊とは如何なる相違あるや……
（六）催眠者の腦に充血せしむるも覺醒せざる所以……
（七）催眠者の呼吸と覺醒者の呼吸とは如何なる差異あるか……
（八）催眠者の呼吸及び脈膊は暗示の有無によりて如何に變化するや……

（三）催眠と睡眠との關係

（1）催眠と睡眠と同じき點……
（一）催眠も睡眠も共に無念無想の狀態なる事實……
（二）睡眠の無念無想と催眠の無念無想と異る點……
（三）催眠も睡眠も共に腦少血の狀態なる事實……
（四）催眠の腦少血と睡眠の腦少血と異る點……
（2）催眠と睡眠と異る點……
（一）催眠者は暗示に感應するに睡眠者は何故に暗示に感應せざるか……
（二）催眠には疲勞を要せざるに睡眠には疲勞を要する所以……
（三）疲勞に基きたる腦少血と疲勞に基かざる腦少血の差點……
（四）睡眠を不足し置きて催眠術を受くると如何なる結果ありや……
（五）純粹なる催眠と純粹なる睡眠とな得る必要條件……

（四）精神と肉體との關係

（一）催眠現象は心身相關の理によりて說明し得らるゝ所以……
（二）肉體は精神に如何なる影響を及ぼすや……
（三）精神は肉體に如何なる影響を及ぼすや……
（四）食麵麭毒麵麭の作用をなせし事實……
（五）觀念にて皮膚に血を出せし事實……
（六）砂糖が漆の如く人にカブレし事實……
（七）觀念により生命を斷ちし事實……
（八）言語にて疥癬を作りし事實……
（九）理由なくして人を赤面せしめし事實……
（一〇）心身相關は如何なる實用的の效果あるや……
（一一）正規の狀態に於ける心身相關と催眠狀態に於ける心身相關とは如何なる差異ありや……

第參卷　準備篇

口畫寫眞版四個木版圖壹個挿入

（一）催眠施術室の裝置……

（一）催眠施術室は何故に閑靜を尊ぶや……
（二）施術室の溫度は如何にして調節するか……
（三）施術室の光線は如何なるを可とするか……
（四）施術室に備ふる器具には如何の注意を要するか……
（五）施術室に備ふるを要する器具……
（六）何等の裝置も道具もなくして施術し得る場合……

（二）術者の心得べき必要條件……

（1）術者が施術上に要する自重自尊……
（一）催眠術は何故に金錢以上に尊きか……
（2）被術者が學理上の說明を求めたるときの處置……
（一）如何なる場合に術者は被術者に催眠學上の說明をなすべからざるか……
（二）如何なる場合に術者は被術者に催眠學上の說明をなさゝればならざるか……
（3）異性を被術者とする場合に殊に注意すべき點……
（一）施術に立會人を要する理由……
（二）施術に立會人を附せざれば如

何なる弊害あるか……
（三）如何なる人は施術室を去らしむべきか……
（4）催眠術を行ふ場合の術者の姿勢……
（一）術者は施術するとき如何なる姿勢をなすべきか……
（5）催眠術を行ふ場合の被術者の姿勢……
（一）施術するに當り被術者の身體の位置を任意になさしめて善き場合と惡しき場合との區別……
（6）施術に着手後術者に必要の覺悟……
（一）施術上に就て術者は如何の覺悟を要するか……
（二）十人が十人悉く催眠せしむるには如何の覺悟を要するか……
（7）催眠の方法變化に就ての注意……
（一）催眠の方法を變化するとき如何なる注意を要するや……
（8）樣子見的又は疑心深き被術者に施術する場合の處置……
（一）樣子見的の被術者とは何ぞや……
（二）疑心深き被術者とは何ぞや……
（三）樣子見的又は疑心深き被術者には如何なる催眠法を採るべきか……
（9）初めての被術者につき殊に注意すべき點……
（一）同一の被術者に就き第一回の施術と第二回の施術とにより如何に注意を異にすべきか……
（10）催眠を思ふ程度に深く進ましむる法……
（一）感受性低き被術者をして深く催眠せしむる祕訣……
（11）被術者が意外の現象を起したるときの處置……
（一）催眠術にて被術者の身體を害したるときは如何にして其害を除くか……
（12）受術後被術者が自分は催眠せざりしと云ふこと能はざる樣にする法……
（一）精神修養と催眠深淺とは如何の關係ありや……
（13）初めて催眠術を實驗するとき必ず成功すべき祕訣……
（一）初めて實驗せんとするときは原理と形式とに就て如何の注意を要するか……
（二）初めて實驗せんとするときは如何の確信を要するか……
（三）初めて實驗を行ふ場合には如何なる被術者が適するか……
（四）初めて實驗したるとき不成功に終りしときは次回は如何にして可なるか……
（五）施術上に就き術者の心得べき十三ケ條件とは何ぞや……

（三）被術者に注意すべき必要條件……

（1）催眠術は無害有効なるを確信せしむる事……
（一）何故に催眠術は身心健康法として良法なるか……
（二）催眠狀態は何時間繼續せしむるも害なきや……
（三）催眠感性の高まるは却て其人の幸福なる理由……
（四）術者は何故に人格を高むる必要ありや……
（五）豫期は催眠の助となるも欲求は催眠の妨げとなる所以……
（2）屹度好結果を得ると確信せしむる事……
（一）何故に術者は被術者をして屹度催眠せしむる實力ありと確信せしむる必要あるや……
（3）被術者に催眠中の心持を斷し置く事……
（一）催眠狀態となれる者の心の有樣は如何……
（二）淺き催眠と深き催眠とによりて其心の有樣は如何に異るか……
（4）術者の言語を漏れなく被術者に記憶せしむる事……
（一）術者の言語を聽き漏す者は何故に催眠せしめ難きか……
（5）催眠の妨げとなることを避け助けとなることを行はしむる事……
（一）催眠の妨げとなる事とは何ぞや……
（二）催眠の助けとなる事とは何ぞや……
（6）勉めて自我を去らしむる事……
（一）自我は何故に催眠の妨げとなるか……
（二）被術者施術中に種々の考へが浮ぶは何故なるか……
（三）催眠術を行ふ前に於て被術者に注意すべき六大要件とは何ぞや……

（四）催眠感性の高低を鑑別する法……

（1）催眠感性とは何ぞや……
（一）催眠感性は千人千樣なる所以……
（二）催眠感性は何故に豫知する必要ありや……
（2）施術に着手前に催眠感性を鑑別する法……
（イ）問診によりて催眠感性を鑑別する法……
（一）問診とは何ぞや……
（二）男女と催眠感性との關係……
（三）年齡と催眠感性との關係……
（四）體質と催眠感性との關係……
（五）智力と催眠感性との關係……
（六）意志と催眠感性との關係……
（七）人格と催眠感性との關係……
（八）性癖と催眠感性との關係……
（ロ）觸診によりて催眠感性を鑑別する法……
（一）自我の高低と催眠感性との關係……
（3）施術に着手後催眠感性を鑑別する法……
（一）施術中如何なる動作をなす者は催眠感性鈍きか……
（4）催眠感性低き者を高くする法……
（一）先天的に[illegible]むる方法……
（5）催眠感性高き者が俄に低くなるは何故なるか……
（一）催眠術によく感じたる者が俄に感ぜなくなる原因……
（二）催眠感性が高かりし者が低くなりしを又高くする方法……

（五）術者と被術者との意思の聯合（ラポー）

（一）催眠者は術者の暗示にのみ感應し他の人の暗示に感應せざるは何故なるか……
（二）意志の聯合を生ぜしむる方法……
（三）如何にせば術者以外の人の暗示に感應するや……
（四）人格變換者が術者以外の人と談話する場合……

（六）被術者の異るにより催眠法を異にすべき點……

（1）被術者の精神異るにより催眠法を異にすべき點……

(一)催眠法の方法及び其理論……
(二)被術者の精神の如何によりて催眠法に如何に代ゆべきか……
(三)被術者を異にすべき點……
(四)被術者婦女なるとき……
(五)夢中に睡眠が混入せるとき睡眠を除去しめんとしたるに睡眠が混じたるときは如何にして純粹の催眠となすか……
(一)被術者を異にすべき點……
(二)被術者兒童なるとき……
(三)被術者を異にすべき點……
(四)被術者を異にすべき點……
(五)治療的と實驗的とにより催眠法を代ゆべきか……
(一)被術者が不具(目、跛、聾、啞)なるとき……
(二)治療的と實驗的とにより催眠法を異にすべき點……

(七)催眠法を行ひたれば被術者睡眠したるときの處置

(一)1 催眠術が睡眠したる鑑別する法……
(一)2 被術者が催眠したるか鑑別する二大方法……
(一)3 令睡眠したるか下撫催眠の方法及び其理論……
(一)4 號接掌催眠法及び其理論……
(一)5 號掌催眠法及び其理論……
(一)6 號催眠法及び其理論……
(一)7 號催眠法及び其理論……
(一)8 號催眠法及び其理論……
(二)1 指結催眠法及び其理論……
(二)2 指結催眠法及び其理論……
(二)3 顔面望看催眠の方法及び其理論……
(二)4 指頭望看催眠の方法……
(二)5 複式望看催眠の方法……
(二)6 息算催眠の方法及び其理論……
(二)7 息算催眠の方法……
(二)8 息算催眠の方法及び其理論……

第四卷 施法篇上

口書寫眞版四個と木版圖五個挿入

(一)催眠せしむる方法

(一)施法の形式は悉く學理上の根據ある所以なるを要する所以……
(二)施法は悉く科學及び哲學に關係ある所以……
(三)單純なる催眠法と複雜なる催眠法との區別……

(一)9 眼指催眠法及び其理論……
(一)10 語言催眠法及び其理論……
(一)11 力心催眠法及び其理論……
(一)12 力書文催眠法及び其理論……
(一)13 首迴催眠法及び其理論……
(一)14 檢撫催眠法及び其理論……
(一)15 挾指催眠法及び其理論……
(一)16 忘肉催眠法及び其理論……
(一)17 强壓催眠法及び其理論……
(一)18 旋指催眠法及び其理論……
(一)19 動息催眠法及び其理論……
(一)20 觸動催眠法及び其理論……
(一)21 念觀催眠法及び其理論……
(一)22 注集催眠法及び其理論……
(一)23 吹息催眠法及び其理論……
(一)24 暖涼催眠法及び其理論……
(一)25 不告催眠法及び其理論……
(一)26 心信催眠法及び其理論……
(一)27 視瞳催眠法及び其理論……
(一)28 摩按催眠法及び其理論……
(二)輕擦法、揉捏法、重擦法、振顫法、壓迫法及び運動法とは何ぞや……
(二)29 吟呻催眠法……
(二)30 喝捧催眠法及び其理論……
(二)31 喝飛叱催眠法及び其理論……
(二)32 合氣催眠法及び其理論……
(二)33 折指催眠法及び其理論……
(二)34 數計催眠法及び其理論……
(二)35 握指催眠法及び其理論……
(二)36 搖動催眠法及び其理論……
(二)37 撫離催眠法及び其理論……
(二)38 線光催眠法及び其理論……
(二)39 面鏡催眠法及び其理論……
(二)40 放香催眠法及び其理論……
(二)41 調單催眠法及び其理論……
(二)42 調復催眠法及び其理論……
(二)43 氣轉催眠法及び其理論……
(二)44 氣利催眠法及び其理論……
(二)45 激强催眠法及び其理論……
(二)46 石藥催眠法及び其理論……
(二)47 氣電催眠法及び其理論……
(二)48 瞬一電催眠法及び其理論……

(一)49 催眠法の方法及び其理論……
(二)49 話電催眠法及び其理論……
(一)50 地隔催眠法及び其理論……
(一)51 笛口催眠法及び其理論……
(一)52 分部催眠法及び其理論……
(一)53 不知者催眠法及び其理論……
(一)54 不諾者催眠法及び其理論……
(一)55 反抗者催眠法及び其理論……
(一)56 睡眠者催眠法及び其理論……
(一)57 B睡眠者催眠法及び其理論……
(二)58 病人を催眠せしむる方法及び其理論……
(三)59 施術前の四要件……
(三)60 千人が千人悉く催眠せしめ難き健康者を催眠せしむる方法及び其理論……
(一)61 催眠法中簡單と複雜、早急と緩、強と無觸、靜と動、除と注、固と集、筋と放散との區別を問ふ……
(三)61 催眠法に就ての注意……
(三)61 催眠法に適不適ある所以……
(三)61 催眠法に撰擇の三方面とは何ぞや……

第五卷 施法篇下

口書寫眞版四個と木版圖一個挿入

(一)催眠狀態の深淺測定法

(一)1 催眠深淺の測定は施術上緊要なる所以……
(一)2 催眠の深淺をば何故に正確に知る必要ありや……
(一)3 催眠深淺の測定を誤ると如何なる弊害ありや……
(一)4 催眠術治療を行ふ實力の有無は何により判別せらるゝや……
(一)5 催眠の深淺を主觀的に區別の說……
(一)6 催眠深淺を客觀的に分類せる說……
(一)7 催眠深淺の區別……
(一)8 催眠深淺の區別……
(一)9 催眠深淺の區別……
(一)10 催眠深淺の區別……
(一)11 催眠深淺の區別……
(一)12 催眠深淺の區別……
(一)13 催眠深淺の區別……
(一)14 催眠深淺の區別……
(一)15 催眠深淺の區別……
(一)16 催眠深淺の區別……
(一)17 催眠深淺の區別……
(一)18 催眠深淺の區別……
(一)19 催眠深淺の區別……
(一)20 催眠深淺の區別……
(一)21 催眠深淺の區別……
(一)22 催眠深淺の區別……
(一)23 催眠深淺の區別……
(一)24 催眠深淺の區別……
(一)25 催眠深淺の區別……
(一)26 催眠深淺の區別……
(一)27 催眠深淺の區別……
(一)28 催眠深淺の區別……
(一)29 催眠深淺の區別……
(一)30 催眠深淺の區別……
(一)31 催眠深淺の區別……
(一)32 催眠深淺の區別……
(一)33 催眠深淺の區別……
(一)34 催眠深淺の區別……
(一)35 催眠深淺の區別……
(一)36 催眠深淺の區別……
(一)37 催眠深淺の區別……
(一)38 催眠深淺の區別……
(一)39 催眠深淺の區別……
(一)40 催眠深淺の區別……
(一)41 催眠深淺の區別……
(一)42 催眠深淺の區別……
(一)43 催眠深淺の區別……
(一)44 催眠深淺の區別……
(一)45 催眠深淺の區別……
(一)46 催眠深淺の區別……
(一)47 催眠深淺の區別……
(一)48 催眠深淺の區別……
(一)49 催眠深淺の區別……
(一)50 催眠深淺の區別……
(一)51 催眠深淺の區別……
(一)52 催眠深淺の區別……
(一)53 催眠深淺の區別……
(一)54 催眠深淺の區別……
(一)55 催眠深淺の區別……
(一)56 催眠深淺の區別……
(一)57 催眠深淺の區別……
(一)58 催眠深淺の區別……
(一)59 催眠深淺の區別……
(一)60 催眠深淺の區別……
(一)61 催眠深淺の區別……
(二)1 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)2 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)3 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)4 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)5 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)6 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)7 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)8 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)9 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)10 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)11 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)12 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)13 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)14 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)15 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)16 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)17 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)18 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)19 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)20 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)21 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)22 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)23 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)24 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)25 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)26 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)27 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)28 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)29 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)30 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)31 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)32 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)33 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)34 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)35 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)36 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)37 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)38 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)39 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)40 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)41 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)42 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)43 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)44 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)45 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)46 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)47 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)48 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)49 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)50 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)51 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)52 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)53 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)54 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)55 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)56 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)57 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)58 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)59 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)60 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……
(二)61 恍惚狀態にある催眠者には如何なる暗示が感應するか……

(二)催眠を覺醒する方法

(一)1 催眠法と學理法とは同一法の順逆なる所以……
(一)2 精神的催眠覺醒法……
(一)3 心理的催眠覺醒法……
(二)1 學理應用して催眠を覺醒する法……
(二)2 生理的催眠覺醒法……
(二)3 生理學を應用して催眠を覺醒する法……
(二)4 併合的催眠覺醒法……
(二)5 生理及び哲學を併用して催眠を覺醒する法……
(二)6 數十日間催眠を持續せしむる法……
(二)7 催眠を覺醒せしむることを得る人……
(二)8 術者以外に如何なる人が催眠を覺醒せしむることを得るや……
(二)9 何人にても自在に覺醒せしむることを得るや……
(二)10 何人にしても覺醒せしむることを得ざる催眠者は何によりて區別するか……
(二)11 催眠の覺醒は徐々と爲さゞれば所以……
(二)12 覺醒法を誤ると如何なる害あり……
(二)13 覺醒法を誤りしより生ずる害を豫防する法……
(二)14 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)15 治療的と實驗的とにより何故に覺醒法を代ふる必要あり……
(二)16 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)17 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)18 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)19 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)20 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)21 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)22 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)23 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)24 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)25 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)26 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)27 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)28 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)29 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)30 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)31 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)32 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)33 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)34 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)35 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)36 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)37 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)38 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)39 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)40 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)41 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)42 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)43 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)44 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)45 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)46 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)47 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)48 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)49 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)50 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)51 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)52 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)53 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)54 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)55 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)56 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)57 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)58 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)59 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)60 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(二)61 治療的と實驗的とにより覺醒法を如何に代ふべきか……
(三)1 モール氏の實驗例……
(三)2 ブレート式の催眠術實驗例……
(三)3 メスメル式の催眠術實驗例……

(三)模範的催眠術の實驗例

（三）ナンシー式の催眠術實驗例……
（二）2 著者の實驗例……
（一）鐵石式の催眠術實驗例……
（二）手足を隨意に不自在とせし實驗……
（三）物品の重量を輕重意の儘とせし實驗……
（四）歩行を停止せしめし實驗……
（五）身體を强直せしめし實驗……
（六）身體を柔軟ならしめし實驗……
（七）無神論者を有神論者となせし實驗……
（八）幻覺の記憶の實驗……
（九）紙片鳥雀となり飛びし實驗……
（一〇）人工的色彩の實驗……
（一一）人工的失語の實驗……
（一二）怒りて喜びし實驗……
（一三）哀しみて樂しめし實驗……
（一四）醜貌を美貌と變じし實驗……
（一五）低脈搏の高低遲速を變じし實驗……
（一六）盆に水を滿たせば鏡の如く姿を映ぜし實驗……
（一七）分娩作用を自在に變ぜし實驗……
（一八）毫毛神經を左右に變ぜし實驗……
（一九）知覺を自在に變ぜし實驗……
（二〇）食慾を自在に變ぜし實驗……
（二一）猫の如く耳を動かさしめし實驗……
（二二）牛馬の如く身體を動かしめし實驗……
（二三）無意識的に覺醒せしめし實驗……
（二四）普通の催眠者と模範的の催眠者とは如何なる區別ありや……

（四）自己催眠術

（一）自己催眠術とは何ぞや……
（二）自己催眠を行ふ方法……
（三）自己催眠者は如何にして自ら我身に暗示するか……
（四）自己催眠によりて病癖を治す方法……

第六卷　暗示篇

（五）自己催眠が容易に成功する者と否とあるは何故なるか……

（一）暗示とは何ぞや

（一）暗示の意義……
（二）暗示と說命との區別……
（三）暗示と名稱との區別……
（四）暗示と十六種の區別……
（五）他人の暗示とは何ぞや……
（六）自働暗示とは何ぞや……
（七）睡眠時暗示とは何ぞや……
（八）催眠暗示とは何ぞや……
（九）精神的暗示とは何ぞや……
（一〇）物質的暗示とは何ぞや……
（一一）言語暗示とは何ぞや……
（一二）接觸暗示とは何ぞや……
（一三）故意暗示とは何ぞや……
（一四）無意暗示とは何ぞや……
（一五）直接暗示とは何ぞや……
（一六）間接暗示とは何ぞや……
（一七）間接に見せる暗示とは何ぞや……
（一八）現在暗示とは何ぞや……
（一九）繼續暗示とは何ぞや……
（二〇）酒に醉はしめし暗示……
（二一）女を掃除せしの暗示……
（二二）數學上の變數を變ぜしの暗示……
（二三）手を下せし少年を掃除好きの記憶を誤らしめし暗示……
（二四）過去の暗示例……
（二五）殘續暗示……
（二六）各商家を惑善家と變らせし暗示例……
（二七）訥辯家を能辯家と變らせし暗示例……
（二八）不遜者を謙遜者と變らせし暗示例……
（二九）殘續暗示に感應する理由……
（三〇）殘續暗示が完全に行はるる程度……

（二）暗示を與ふる場合に就ての注意點

（一）術者が確信せざることは暗示する理由……
（二）被術者に譯語なる言語を以て暗示する所以……
（三）催眠の深淺と暗示の言語の高低平行なる言葉を低聲にて與へざる場合……
（四）暗示とは平淺なる言葉を低聲にて與へざれば重聽者に低聲にて暗示しよく聽へざる法……
（五）暗示とは精神力を籠めて與ふる言語は簡單明瞭なる所以……
（六）暗示とは要する所以……
（七）暗示する言語は如何に語尾を改むるべきか……
（八）暗示の言語は現在的にして確定的なる要する所以……
（九）暗示の言語は何故に被術者に必要あるか……
（一〇）意識的に被術者に暗示に注意せしむる必要あるか……
（一一）暗示の大奧義とは何ぞや……
（一二）暗示術の內容は被術者の精神と合致する所以……
（一三）暗示は何故に反覆するの要あるか……
（一四）有要の暗示と無用の暗示とは何ぞや……
（一五）精神により區別する暗示とは何ぞや……
（一六）自分以外の術者の催眠術に感應せざる樣にする法……
（一七）暗示を與ふる上に於て注意すべき十二大要件とは何ぞや……

（三）實驗的暗示を與ふる順序

（一）何故に暗示は簡單より複雜に進むる必要あるや……
（二）催眠者に就き感應する暗示と感應せざる暗示とは區別する法……
（三）催眠程度同一なるも暗示と感應程度異なる事實……
（四）第一期の催眠狀態にある者に第二期の催眠狀態にある者に順序……
（五）第二期の催眠狀態にある者に第三期の催眠狀態にある者に順序……
（六）第三期の催眠狀態にある者に與ふる暗示の順序……
（七）暗示と感應の範圍を擴張する法……

第七卷　現象篇

（一）催眠者に觀念運動及び模擬運動をなさしむる法

（1）催眠術上の觀念運動の意義……
（二）觀念運動に手を振らせし實驗……
（三）觀念運動とは何ぞや……
（四）觀念運動に手を擧げさせし實驗……
（五）連續して手を擧げさせし實驗……
（六）觀念運動にて書記させし實驗……
（七）觀念運動の理論……
（2）催眠術上の觀念運動……
（一）模擬運動の意義……
（二）模擬運動とは何ぞや……
（三）模擬運動にて舌を出させし實驗……

（四）催眠者を閉目せしめ置き模擬運動をさせし實驗……
（五）模擬運動の理論……
（六）暗示に於ける模擬運動と催眠狀態……
（七）觀念運動及び模擬運動と催眠術治療との關係……

（二）催眠者の感覺を左右する法

（一）催眠者は暗示なくても覺醒者に比して感覺を異にする理由……
（二）閉目せしめ物品に手を觸れず目品名を當てさせし實驗……
（三）五官の移轉と感覺鋭敏による現象との差異……
（四）心眼顯微鏡的の働をなしたる實驗……
（五）透視の實驗……
（六）嗅覺により品名を當てさしたる實驗……
（七）線香の灰の落る音を聽かせし實驗……
（八）僅少の酸味を非常に强く感じさせし實驗……
（九）感覺を脫失させし實驗……
（一〇）催眠者の感覺は何故に暗示により左右せらるゝか……
（一一）解剖上に異常なくして感覺が左右せらるゝは何故なるか……
（一二）注意の作用を肉體に及ぼす事實……

（三）催眠者に幻覺錯覺を起さしむる法

（一）幻覺錯覺の意義……
（二）幻覺とは何ぞや……
（三）幻覺とは何ぞや……
（四）消極的幻覺と積極的幻覺とは何ぞや……
（五）偶發的の幻覺錯覺とは何ぞや……
（1）幻覺錯覺の現象……
（2）各官に就ての錯覺……
（一）口笛を驚聲と聽かせる實驗……
（二）冷水を酒と飲ませる實驗……
（三）腐臭を麝香と嗅がせる實驗……
（四）木葉を紙幣に見せし實驗……
（五）各五官に就ての幻覺……
（六）空間に妖怪を見せる實驗……
（一）帽子を浮べて見せし實驗……
（二）無音琴の音を面白く聽かせし實驗……
（三）錢入ちの美味を振舞し實驗……
（四）薔薇花の香を自在に發せし實驗……
（五）居らぬ虱に喰はせし實驗……
（六）全身幻想と局部幻想との區別……
（3）幻覺錯覺の原理……
（一）催眠者が暗示の儘に幻覺錯覺を起すの原理……
（二）正覺の原理……
（三）幻覺の原理……
（四）錯覺及び幻覺の効果……
（五）體內の諸機能にも錯覺幻覺を起さしめ得る事實……
（六）記憶の意義……
（一）一度耳目に觸れし事は終生腦髓に印象する事實……
（二）無學の下女催眠中に外國語を語りし理由……
（三）催眠中の事を覺醒後に少しも記憶せざる者と悉く記憶し居る者とある理由……

（四）催眠術にて記憶を左右する法

（五）催眠中の事を覺醒後に半記憶し半記憶せざるは何故なるか……
（六）催眠中の事を覺醒後に少しも記憶せざる程度の催眠狀態……
（七）忘却せし夢を廻送せしめし實驗……
（八）或事を忘却せしめたり記憶せしめたり意の儘とせし實驗……
（九）記憶力弱き者を强くせし實驗……
（一〇）催眠者に祕密を語らしたる實驗……

（五）術者の精神を被術者に移送する法

（一）精神の移送とは何ぞや……
（二）心力にて人を呼び寄せし實驗……
（三）心力にて人の步行を停めし實驗……
（四）精神移送は如何なる催眠程度にて行はるゝや……
（五）術者の眼覺を催眠者に移送せし實驗……
（六）術者の嗅覺を催眠者に移送せし實驗……
（七）術者の觸覺を催眠者に移送せし實驗……
（八）術者の視覺を催眠者に移送せし實驗……
（九）術者の聽覺を催眠者に移送せし實驗……
（一〇）心力にて肉體を左右せし實驗……
（一一）心力にて畫を書かせし實驗……
（一二）精神移送の効果は催眠術治療上に如何なる關係ありや……

（六）催眠者の人格を變換する法

（一）人格變換とは何ぞや……
（二）人格轉換とは何ぞや……
（三）故意的人格變換と偶然的人格變換との區別……
（四）人格變換の行はれ得る催眠程度……
（五）人格を變換せしむる二種の暗示法……
（六）老父を變換せる實驗……
（七）少年を海軍大將に變換せる實驗……
（八）無音樂者を音樂者と變換せる實驗……
（九）學生を涙花節の藝人と變換せる實驗……
（一〇）中學生を藝者に變換せる實驗……
（一一）老母を學生と變換せる實驗……
（一二）無筆者を書家に變換せる實驗……
（一三）人間を獸類に變換せる實驗……
（一四）人間を無生物に變換せる實驗……
（一五）一人が同時に二人に變換せる實驗……
（一六）一人が同時に二種の動物と變換せる實驗……
（一七）一人が同時に數種の樂器と變換せる實驗……
（一八）一人が同時に四名に變換せる實驗……
（一九）小僧を文士に變換せる實驗……
（二〇）催眠者の作りたる文員を嘶家に變換せる實驗……
（二一）催眠者の作りたる店員を嘶家に變換せる實驗……
（二二）下女を雅客に變換せる實驗……
（二三）催眠者の作り詩歌を嘶の筆記に變換せる實驗……
（二四）老婆を論客に變換せる實驗……
（二五）催眠者の爲せる演說の筆記に人格が變換するや……
（二六）催眠者の知らぬ者に人格が變換するや……
（二七）身體にて形容する能はざる

者に人格が變換するや
（二九）變換せる人格を又他の人格に變換することを得るや
（三〇）變換せる人格と第三者と談話し得るや
（三一）變換せる人格と人格との間は幻覺錯覺が共通するや
（三二）一人を同時に二人に變換し東西兩所に遊ばしむるを得るや
（三三）人格變換を覺醒後も尚繼續せしむるを得るや
（三四）催眠者に人格變換中の事を覺醒後迄記憶せしむるを得るや
（三五）人格變換者を其儘何日迄も棄て置けば如何
（三六）人格變換は實用上如何なる效果あるや
（七）催眠者を千里眼者とする法
（一）透視天眼通神通力又は千里眼とは何ぞや
（二）千里眼の出來る催眠程度
（三）催眠者を閉目せしめて時計の時間を當てさしたる實驗
（四）催眠者が答をなさゞる場合に答をなさしむる法
（五）催眠者の答が當らざるとき當る樣にする法
（六）催眠者に別室の模樣を語らしたる實驗
（七）催眠者に箱中の文字を讀ましたる實驗
（八）催眠者に遠方の狀況を語らせたる實驗
（九）催眠者に人の懷中物を當てさせたる實驗
（一〇）千里眼は如何なる順序に實驗すべきか
（一一）千里眼の原理

第八巻治療編上

口畫寫眞版四個と木版圖一個挿入

（一）催眠術にて治し得る疾患
（1）催眠術と治療との關係
（一）催眠術の效用
（2）催眠術治療にて治し得る疾患なるや否やを定むる標準
（一）催眠術治療に先天的と後天的とにより差異あるや
（二）疾患が先天的と後天的とにより治療上如何の差異あるや
（三）疾患が機質的と機能的とにより治療上如何の差異あるや
（四）機質的疾患よりも機能的疾患を治するに困難なることあるは何故なるか
（五）ベルンハイム氏が治し得たる疾患
（六）リンギエール氏が治し得たる疾患
（七）チコベンベルグ氏が治し得たる疾患
（八）ウエツテルストランド氏が治し得たる疾患
（九）フチーレル氏が治し得たる疾患
（一〇）鐵石が治し得たる疾患
（一一）催眠術にて治し得る疾患なるや否やを定むる五大條件
（一二）疾患の如何を問はず施術すべき場合
（一三）食道狹窄病全治の實驗
（一四）化膿性膝關節炎全治の實驗
（一五）催眠術治療の大特色
（一六）何病は何回の施術にて全治するや
（二）治療暗示に就き注意すべき點
（一）治療の暗示は實驗の暗示より如何に代ゆべきか
（二）治療の暗示には何々十大形式ありと云ふ
（三）類似法とは何ぞや
（四）心力法とは何ぞや
（五）口頭法とは何ぞや
（六）合圖法とは何ぞや
（七）氣合法とは何ぞや
（八）觸手法とは何ぞや
（九）波金法とは何ぞや
（一〇）音樂法とは何ぞや
（一一）發聲法とは何ぞや
（一二）變換法とは何ぞや
（一三）絕對法とは何ぞや
（一四）疾患の原因除去の暗示例
（一五）現在症の除去暗示例
（一六）將來の健康なる暗示例
（一七）原因不明なる疾患を治する暗示例
（一八）醫學を知らざる者が行ふ治療の暗示例
（一九）大概の疾患に對して一樣に暗示を與ふることを得る點
（二〇）觸病、頭痛、頭重、不眠、健忘、耳鳴、神經衰弱、歇私的里に就ての觸手暗示點
（二一）重聽に就て諸病に就ての觸手暗示點
（二二）脊髓諸病に就ての觸手暗示點
（二三）諸神經痛、神經麻痺、僂麻質斯、脚氣に就ての觸手暗示點
（二三）胃腸病、糖尿病及び便祕に就ての觸手暗示點
（二四）陰萎、夢精、遺精、早漏、睪丸炎、子宮病に就ての觸手暗示點
（二五）患部數ある患者に與ふる暗示法
（二六）數十回の施術を要する患者に與ふる暗示法
（二七）如何なる患者にも與ふるを要する七大暗示
（二八）全治を確信せしむる暗示法
（二九）苦痛を悉く除去する暗示法
（三〇）胃腸を健全にし食慾を增進せしむる暗示法
（三一）夜眠して夢を見ざる樣にする暗示法
（三二）精神を強固にして善を行ひ惡を避くる暗示法
（三三）再發を防止する暗示法
（三四）心身を爽快にし活潑となす暗示法
（三五）何故に攝生法を暗示する必要あるや
（三六）心理的攝生法
（三七）物理的攝生法
（三八）腦充血の患者に暗示すべき攝生法
（三九）脚氣患者に暗示すべき攝生法
（四〇）癲癇患者に暗示すべき攝生法
（四一）急性喉頭加答兒患者に暗示すべき攝生法
（四二）治療の暗示につき注意すべき七大要件

（三）催眠術治療檢診法

（1）催眠術治療と檢診法との關係
（一）肉體檢診法と精神檢診法との

區別
（二）檢診を誤りし場合と治療との差異
（三）催眠術治療に由りて如何なる場合に檢診を修むべき醫學科目
（四）法の如何を問はず術者が催眠術治療を行ふ時注意すべき事
（2）患者に對する態度
（一）檢診の必要
（二）間診の必要
（三）間診の必要
（四）態度診の必要
（五）年月日の間診の必要
（六）過去の經過の間診の必要
（七）原因の間診の必要
（八）有無の間診の必要
（九）遺傳の間診の必要
（一〇）發病の間診の必要
（一一）既往症の間診の必要
（一二）嗜好品の間診の必要
（一三）食慾の有無の間診の必要
（一四）便通の有無及び便通の適否の間診の必要
（一五）診察の必要
（一六）睡眠の間診の必要
（一七）從來の療法の間診の必要
（一八）精神の狀態の看破の必要
（一九）身體の異狀を看破の必要
（3）望診法
（一）體格の良否を知る法
（二）體質の如何を知る法
（三）營養の良否を知る法
（四）容貌により病症を知る法
（五）患部の如何により病症を知る法
（六）體溫を檢する法
（4）體溫を檢して健否を定むる標準
（5）脈搏を檢して健否を定むる標準
（6）呼吸を檢して健否を定むる標準

第九巻治療篇下

口畫寫眞版五個挿入

（一）模範的催眠術治療の實例

（1）鐵石が催眠術治療を引受くる順序
（一）催眠術治療申込手續を設くる必要
（二）催眠術治療券を作り置く必要
（三）催眠術治療の雛形
（2）急性筋肉僂麻質斯治療の實例
（イ）急性筋肉僂麻質斯間診例
（一）住所、職業、氏名、年齡、間診例
（二）現在症間診例
（三）發病年月日間診例
（四）疾患の經過間診例
（五）疾患の原因間診例
（六）遺傳の有無間診例
（七）既往症の有無間診例
（八）嗜好物の有無間診例
（九）食欲の進否及び便通の適否間診例
（一〇）睡眠間診例
（一一）既往の療法間診例
（一二）催眠術治療を受けたる有無間診例
（一三）醫術と催眠術治療との能否の診例
（一四）突然避くる療法の診例
（一五）攝生法に就ての診例
（ロ）精神障害の診例
（一）急性筋肉僂麻質斯の診例
（二）體格望診の結果
（三）體質望診の結果
（四）營養望診の結果
（五）容貌望診の結果
（八）患部望診の結果
　　急性筋肉僂麻質斯三容態檢診

の實例
（3）呼吸脈搏及び體溫檢診の結果
（一）急性筋肉僂麻質斯治療暗示の實例
（二）實驗的治療暗示例
（三）模範的治療暗示例
（ハ）豫備暗示と音へ居りても暗示例
（四）施術の周圍の音聞へ居りても確信せしむる暗示
（五）催眠中の狀態なりと信ぜしむる暗示
（六）暗示を良く受け入るゝ樣にす
（七）る暗示は全治すると確信せ
（八）疾患部に對し暗示何例
（九）食欲を進め便通を整へる暗示
（一〇）不眠を治療するの暗示例
（一一）病原除去の暗示例
（一二）攝生法の守るべき暗示
（一三）喫烟に對し暗示例
（一四）警日暗示の缺陷
（一五）一般の缺陷
（一六）向上の暗示
（一七）催眠術の施術居りしを其の精神肉體に及ぼせる暗示
（八）と施すべき療法
（九）急性筋肉僂麻質斯の第二回目の施術と其の施術及び暗示
（4）脊髓癆に就ての暗示例
（イ）脊髓癆患者の實例
（一）每日受診者の暗示例
（二）脊髓癆の何故に來すかとの暗示例
（ロ）脊髓癆治療の實例
（一）縮似法の暗示例
（二）心力法の暗示例

（三）口頭法の暗示例
（四）合圖法の暗示例
（五）氣合法の暗示例
（六）觸手法の暗示例
（七）波金法の暗示例
（八）音樂法の暗示例
（九）變聲法の暗示例
（一〇）發覺醒後の暗示例
（一一）吃音の強烈なる暗示の實例
（5）吃音の治療法
（イ）吃音の原因と診察の例と症候
（一）吃音の檢診の例
（二）催眠術治療に依りて吃音を治し得る例
（ロ）と言葉によりて治し得る吃音
（一）吃音者の周圍の物音に注意を與ふる解
（二）吃音者の催眠程度
（三）吃音者に催眠暗示を與ふる例
（四）氣合と不平に醒覺せざる例
（五）再三催眠を與ふる私の術者
（六）ると漏らす施術法
（六）施術の如何に依りて催眠術せざる場合の五ヶ條の攝生法
（七）吃音者第一回施術の實例
（八）生音と第二回同日の催眠術施術淺くして實例
（九）患者と深く施術し得たる實例
（6）遺尿病の原因症候の診例
（イ）遺尿病の檢診法
（一）遺尿病の原因
（二）遺尿病治療の實例
（三）知るべからざる遺尿病の實例は何にあるかを探
（イ）遺尿症の診例
（一）遺尿病治療の暗示例
（二）催眠中に口訣を與ふる頭暗示例
（三）遺尿者すなはち治療暗示例及は疾患
（三）遺尿者の遵守すべき攝生法

（四）十九ヶ年間の遺尿一回の施術……
（7）神經衰弱治療實例……
（4）神經衰弱檢診の實例……
（一）一回の施術に要する時間……
（二）數名に施術したる實例……
（三）患者の症候……
（四）病狀を看破せし實例……
（五）赤面癖の症候……
（六）不思議なる檢診……
（七）怖ろしき神經衰弱者の症候……
（八）病狀看破の實例……
（ロ）神經衰弱治療の暗示例……
（一）三名の患者を一度に治療した例……
（二）施行後身體に異常ありし時其狀を除く暗示例……
（8）無痛分娩の實例……
（4）産婦檢診の實例……
（一）無痛分娩し得る産婦と否との區別點……
（ロ）無痛分娩暗示の實例……
（一）無痛分娩の必要の場合……
（二）無痛分娩の暗示例……
（三）催眠術分娩を行ひし爲めに却て害ある場合とは何ぞや……

（二）催眼術にて疾患の治する理由……
（一）催眠術にて疾患を治し得る哲學上の根據……
（二）催眠術にて疾患を治し得る科學上の根據……
（三）機質的疾患が催眠術にて治する理由……
（四）傳染病が催眠術にて治する理由……

（三）催眠術治療成功の極意……
（一）催眠術治療家として名聲を轟かし得る秘決……
（二）本書全卷を應用する必要……
（三）至誠を以てする必要……
（四）金錢を欲しがらざる必要……
（五）患者に滿足を與ふる必要……
（六）人格を具ふる必要……
（七）催眠術治療を行ひたるも効果が擧らず信用を失ひたる者ある理由……

第十卷 動物篇

口書寫眞版四箇と木版七箇入……

（一）動物催眠の淵源……
（一）動物を催眠せしめて何の効あるや……
（二）動物催眠の沿革……

（二）動物催眠と人間催眠との差異……
（一）動物催眠と人間の老幼と動物の老幼との差異……
（二）動物催眠法と人間催眠法との差異……
（三）人間の催眠狀態と動物の催眠狀態との差異……
（四）催眠せる人間が暗示に感應する狀態と催眠せざる動物が暗示に感應する狀態との差異……
（五）人間の催眠覺醒法と動物の催眠覺醒法との差異……

（三）動物を催眠せしむる法……
（1）鷄及び鶩を催眠せしむる法……
（一）動物中尤も催眠せしめ易きは何なりや……
（二）鷄又は鶩を催眠せしむる四大方法とは何ぞや……
（三）鷄の催眠狀態を永く持續せしむる法……
（四）催眠せる鷄は如何なる暗示に感應するや……
（五）催眠術を應用して鷄に多く産卵せしむる法……
（六）鷄の催眠覺醒する法……
（一）犬及び猫を催眠せしむる法……
（二）如何なる犬猫は催眠せしめ易かりや……
（3）天竺鼠及び兎を如何にして催眠せしむる法……
（一）天竺鼠及び兎は如何にして催眠せしむるや……
（二）獸類中被術動物として最も適するは何なるや……
（4）蟾蜍及び龜を催眠せしむる法……
（一）蟾蜍及び龜は如何にして催眠せしむるや……
（二）蟾蜍催眠せしめ易き時と難き時とは何により區別するや……
（三）蟾蜍及び龜は催眠すると如何なる狀態となるや……
（5）雀及び鳩を催眠せしむるや……
（一）雀及び鳩は如何にして催眠せしむるや……
（6）蟻及び蠅を催眠せしむるや……
（一）蟻及び蠅は如何にして催眠せしむる法……
（7）鯉及び鰻を催眠せしむるや……
（一）鯉及び鰻は如何にして催眠せしむる法……
（8）海老及び烏賊を催眠せしむる法……
（一）海老及び烏賊は如何にして催眠せしむるや……
（二）海老特有の催眠狀態……
（9）蟬及び蟹を催眠せしむる法……
（一）蟬及び蟹は如何にして催眠せしむるや……
（10）蜥蜴及び蝎を催眠せしむる法……
（一）蜥蜴及び蝎は如何にして催眠せしむるや……
（11）蛇及び守宮を催眠せしむる法……
（二）蛇及び守宮は如何にして催眠せしむるや……
（12）牛及び馬を催眠せしむる法……
（一）牛及び馬は如何にして催眠せしむるや……

（四）動物催眠の原理……
（一）動物は如何の理によりて催眠するや……
（二）想像と……
（三）恐怖と……
（四）睡眠說と……
（五）暗示說と……
（六）驚怯說と……
（七）中樞說と……
（八）平行說と……
（九）人間催眠の原理と動物催眠の原理との異同……

以上

此目次を精讀して內容の充實を知られよ

●金壹圓以下の注文は迷惑につき絶對に謝絶す●

古屋鐵石述 自第一卷至第十卷十冊完結
◎高等催眠學講義錄 壹冊定價郵共 金六十錢

古屋鐵石著（初學者に適する書）
◎驚天動地 催眠術獨習自在 定價郵共 四拾貳錢

一公爵二伯爵題五博士序 古屋鐵石著
◎催眠術寶典 定價拾貳錢送料內地卅六錢韓鮮六拾五錢

古屋鐵石著 上製一圓五十錢 並製壹圓六錢
◎祕密獨習成功確實 女催眠術

古屋鐵石著 送料內地十八錢 朝鮮四拾五錢
◎神靈治療法 定價壹圓五十錢

古屋鐵石著
◎男女 生殖器病獨療法 價郵共 參拾貳錢

農商務省實用新案登錄濟
◎複式催眠球 價郵稅共 三圓五拾錢

博士學士五十有餘名論集 菊大版一百十二頁
◎不思議の研究 價郵稅共 六拾四錢

バーキンス博士發明品模造（金屬製品）
◎催眠治療具 價郵稅共貳圓五拾貳錢

古屋鐵石著
◎新案 神經衰弱獨療法 價郵稅共 參拾貳錢

明治學士 雨宮良作先生著
◎文學論究 取締法規詳解 價郵稅共 五拾貳錢

高麗版 三枚一組
◎催眠術繪葉書 價郵稅共 參拾貳錢

年貳回（春秋）發行（精神研究會機關雜誌）
◎國民道德 一冊賣價郵稅 共五拾錢

八冊合本金文字入
◎雜誌 國民道德合冊 定價壹圓八拾錢

國民道德前身雜誌合冊上等製本
◎精神治療新報合冊 價郵共壹圓八拾錢

古屋鐵石述（上中下三冊）
◎運命豫言術講義錄 分與金參圓

古屋鐵石考案（金屬製品）
◎催眠凝視球 價郵稅共 壹圓五拾錢

井上圓了博士序 大野美惠丸著
◎催眠學術新論 藁習講話 價郵稅共 九拾貳錢

米國製模造品（臺灣支那は送料四十五錢）
◎ブランセット 定價壹圓五拾錢送料拾八錢

獨立亭成功著（附田舍生活副業法）
◎男女 東京にて自活する法 價郵稅共 參拾貳錢

內務大臣御屆濟（精神治療家必携）
◎催眠精神治療券綴 價郵稅共 八拾四錢

松本天籟著
◎靈魂不滅論 價郵稅共 貳拾貳錢

東久世伯爵題 高波博士序 古屋鐵石著
◎催眠術獨誓古 價郵稅共 六拾四錢

八冊合卷總クロース金文字入（國民道德前身）
◎精神新報 合綴 定價小包料共 壹圓八拾錢

◎扁額適用 催眠術實驗寫眞版 價郵稅共 貳拾貳錢

古屋鐵石著
◎催眠法律論 價郵稅共 貳拾五錢

古屋鐵石著
◎催眠宗教論 價郵稅共 六拾四錢

古屋鐵石著
◎坐禪獨習法 價郵稅共 六拾五錢

古屋鐵石著
◎獨習自在 自己催眠 價郵稅共 壹圓四錢

土方伯爵題 磯部博士序 古屋鐵石著
◎宗教奇蹟研究 價郵稅共 六拾四錢

古屋鐵石著
◎男女運命豫知術 價郵稅共 壹圓四錢

伊藤公爵題 井上博士序 古屋鐵石著
◎驚神的大魔術 價郵稅共 壹圓四錢

嘉納講道館長題 松本博士序 古屋鐵石著
◎氣合術獨習法 價郵稅共 壹圓四錢

東久世伯爵題 古屋鐵石著
◎學理應用家庭禁厭術 價郵稅共 壹圓四錢

讀者への御注意（山師と詐欺師）

本會主張の學說と實驗とに反する廣告をする者は、多くは山師又は詐欺師と思ひ、引き掛からぬ樣御注意なさいまし。

面會、何人にても、突然本會を御訪問になりますと、會長は面會致しません、豫め御手數乍ら往復葉書を以て用件を記し、面會日の都合御問合せの上に御訪問下さい、然れば必ず御訪問の御意思御貫徹になる樣に盡力致します、突然の御訪問では先約ある爲め遺憾乍ら面會を謝絕します、又面會しても僅か二三分時の外面會することは出來ません。（本會機關雜誌は春秋二回の發行です）

郵書、質問書、受驗答案其他郵書を本會へ御提出に就ては、其都度雜誌「國民道德」に其方式を掲げます、其注意に反するときは總て無効とします。

定價、本會發行の書籍は內務省に屆出の定價より一錢でも割引して賣買する事を禁ぜられてあります之を犯すと罰金を取らるゝ規定（東京市日本橋區材木町 東京書籍商組合事務所に規定書具へあり）がありますから、必ず値上げの新定價で御求め下さい。

治療、單に本會の講義錄を讀みしに止まり、會費を納めず、本會に何等交渉なく治療を行ひ、警察より取調べられ初めて本會を引き合ひに出し、爲に本會は警察の照會に接し、非常に迷惑を蒙ること往々あり、今後斯る場合に斯る人に關しての警察署の照會に對しては斷じて治療を禁止せらるゝ樣回答します、故に斯る人は決して本會を引き合ひに出してはなりません。

葉書の注文と問合には返答しません。

280
741

終